

古代における地域支配と河川

Regional Control and Rivers in Ancient Times

平川 南

はじめに

①内陸部に“第二河口”設定

②水運・水害両面を併せもった官衙の造営

③「津司」と「津長」

④新興豪族の居館も河川沿いに船着場を設営

むすびにかえて

【論文要旨】

今、歴史学に対して新たな研究視点として、日本の歴史における自然と人間の交渉史の実像を明確に示すことが求められている。そこで、本稿は、自然環境としての河川との関わりを通して地域支配の実態を明らかにしたい。

以下、本稿では、地域支配と河川について、次の四つの視点から究明を試みた。

- ① これまでの地理的關係から内陸部とみられた地域の中に、外洋に面する河口と同様に、直線的に河川が外洋につながり、“第二河口”と位置づけられた地域が存在したのではないかと。
- ② 宮都や城柵のような国家施設造営にあたり、それらの施設は水運の便を十分に活用するために宮都や城柵内部に河川を引き込む形で占地している。しかし、それは洪水という災害を同時に抱え込むことを意味している。いいかえれば、これまで長岡京や志波城について、その廃都や廃城は水害を直接的理由としてきたが、それは造営当初から十分に予測できたのではないかと。
- ③ 律令体制下に、郡の津（港）として外洋に望む河口部や津を管理する「津司」が設置された。その津司では「津長」が責任者として、津に出入する客などに応じたのであろう。
- ④ 9世紀後半から10世紀にかけて、各地で新たに台頭してきた豪族層の拠点施設は、河川を取り込み、船着場を設け、施設内では手工業的生産や農業経営が活発に行われたことが近年の発掘調査の成果から知ることができる。

さらに付け加えて、古代の河川の運行においても、近世同様、曳船方式が活発に実施された点を強調した。

はじめに

現代社会において、新しい歴史学に課せられた大きな使命の一つは、日本の歴史における自然と人間の交渉史の実像を明確に示すことである。

その日本歴史における自然とのかかわりについて小稿は、古代の地域支配のあり方の中で確認してみたい。

従来は、古代の地域支配の形成を政治的・経済的要因のみから説明してきたといっても過言ではない。しかし、地域支配のための拠点は、行政のみならず、物資の生産および流通などの諸機能を十分に活用できる地として選定されたと推測できる。そのうえ、地方豪族は気象条件にはじまり、地形・地質そして動植物の生態など、あらゆる自然環境を配慮し、地域支配の拠点として占地したとみることができる。

ところで、日本古代史研究は、近年、多様な資料に基づいて研究の掘り込みをみせているが、いまだその底流には、律令国家の中央集権的支配体制像が根強く描かれている。次に掲げる3点は、従来の律令国家像を見直し、新たに古代地方社会の実像を描くための重要な視点であると考えられる。

① 中央集権的支配体制下における中央と地方との対比構図



地方豪族の自立的活動や地域間交流

② 律令租税体系からの生産活動の把握



地方豪族を中心とする在地生産構造の解明

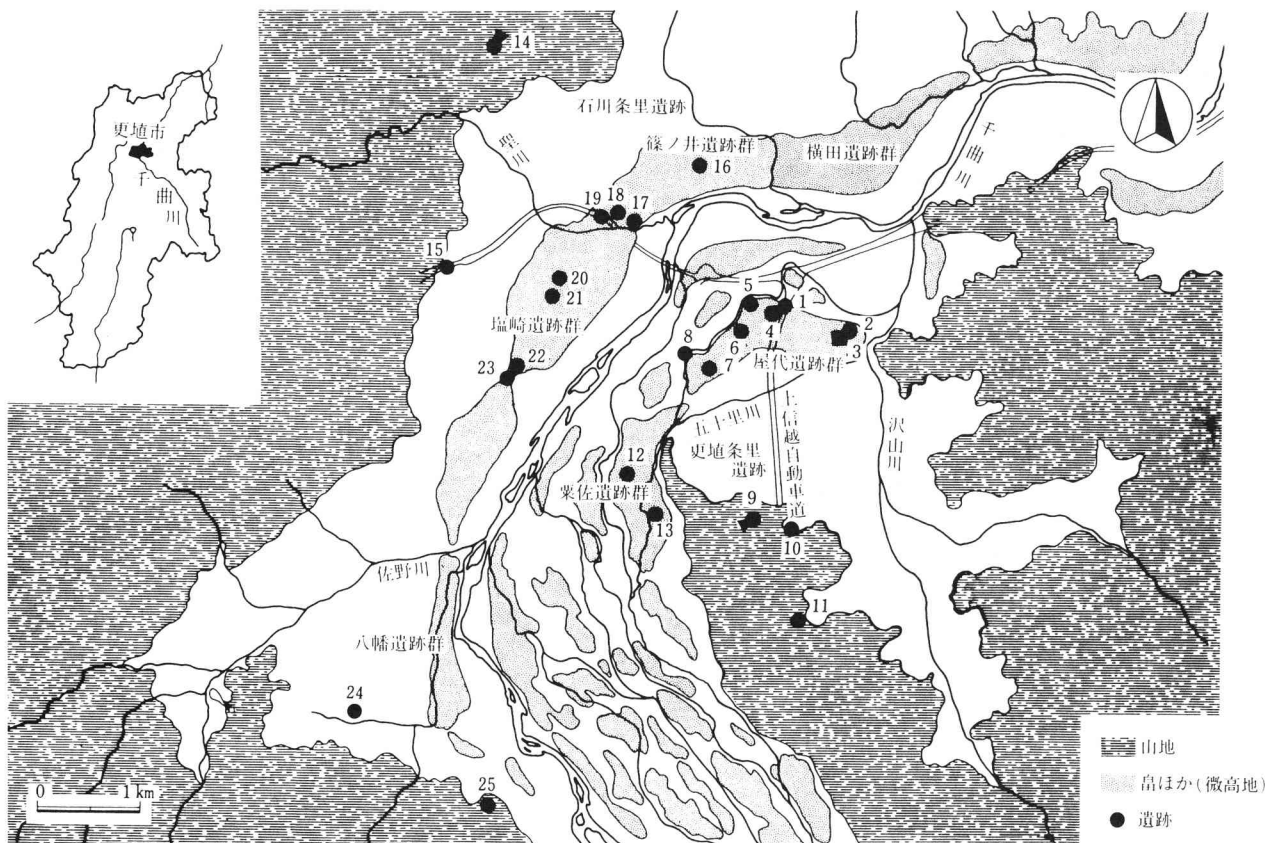
③ 地方豪族の拠点・郡家は、宮都およびその出先機関としての国府の小型で定型化された政治的場を想定



地方支配の拠点形成過程およびその構築された諸機能の空間構成と有機的結合

すなわち、これらの視点は、古代の地域支配の実態把握のためには欠かすことのできないものである。在地における多様な生産と、その生産物を陸上のみでなく水上交通を最大限活用し、地域間交流の中で交易することによって、豪族の経済的基盤が確立される。また、その流通ルートを直接的に掌握する、例えば河口や津を支配することが、大きな地域支配の原動力となった点も注目しなければならない。

そこで、小稿では、日本列島の歴史と自然とのかかわり史の一断面について、河川が古代地域支配にいかに大きな役割を果たしたかを具体的事例を通じて明らかにしてみたい。



1. 屋代遺跡群⑥区 2. 大宮遺跡 3. 雨宮廃寺跡 4. 大境遺跡 5. 城之内遺跡 6. 松ヶ崎遺跡 7. 馬口遺跡
8. 地之目・一丁田遺跡 9. 森將軍塚古墳 10. 大穴遺跡(古墳) 11. 清水製鉄址遺跡(古墳) 12. 五輪堂遺跡
13. 小島遺跡 14. 川柳將軍塚古墳 15. 鶴前遺跡 16. 篠ノ井遺跡群新幹線地点 17. 大規模自転車道地点
18. 市道山崎・唐猫線地点 19. 高速道地点 20. 殿屋敷遺跡 21. 塩崎小学校遺跡 22. 松節遺跡
23. 市道 253 号線地点 24. 社宮司遺跡 25. 上ノ田遺跡

図1 長野県更埴市屋代遺跡群とその周辺(財長野県埋蔵文化財センター『長野県屋代遺跡群出土木簡』1996年より)

本基幹研究において主なフィールドとした善光寺平南部を拠点にした地方豪族(科野国造)勢力はいうまでもなく千曲川に大きく依拠しているのである。そして長野県更埴市屋代遺跡群の大規模な発掘調査によって、その地域支配の拠点の実態がかなり鮮明になってきた。

ここでは、小稿の冒頭にあたり、筆者も加わった屋代遺跡群出土の木簡の調査成果をまとめた財団法人長野県埋蔵文化財センター『長野県屋代遺跡群出土木簡』[1996年]の第1章「遺跡の概観」の中の「周辺の環境」から引用しておきたい。

南佐久郡川上村に端を発した千曲川は、急流となって北西方向に流れ下ってくる。その後、善光寺平の入り口に当たる更埴市八幡付近に至ると大きく北東方向に屈曲する。この付近から流れは緩やかとなり、所々に淀みを持つ中流域になる【図1】。屋代遺跡群周辺では砂礫に変わって細砂やシルトが堆積し、水田耕作に適した環境が形成される。

屋代遺跡群・更埴条里遺跡の周辺は、一重山によって千曲川の流れが遮られ、氾濫の直撃を受けることなく安定した地区となっている。その反面、屋代遺跡群⑤区から更埴条里遺跡全域にわたって五十里川以外に千曲川の分流がなく、南側の山地の水量が少ないことや降水量が少ないこととともに、水不足の一因になっている。屋代遺跡群・更埴条里遺跡地区の開発には、水路の掘削・管理が重要な問題となっていたのである。

弥生時代にはこうした自然条件を活用し、自然堤防上（屋代遺跡群）に集落を作り、後背湿地（更埴条里遺跡）に水路を伴う水田を開発し始める。古墳時代前期以降、森將軍塚古墳をはじめ大規模な前方後円墳が周辺山地の尾根上に築造される。このことは更埴地域一帯の生産力を背景とした一大勢力がこの地に成立したことを示している。

屋代遺跡群で出土した木簡を伴う遺構の時期は、主に7世紀後半から8世紀前半である。その時期の周辺遺跡の状況を見ると、山地緩斜面を除くと、千曲川兩岸の自然堤防上に集落が展開している。この時期の水田跡については屋代遺跡群⑥区など一部でしか検出されていない。また、千曲川右岸が埴科郡、左岸が更科（級）郡に比定されている。現段階では、9世紀代に比べ遺構の広がりとは薄く、屋代遺跡群の所在する埴科郡については官衙関連施設と思われる遺構は明確になっていない。

8世紀末から、屋代遺跡群では広範囲に集落が広がる様子がうかがえ、9世紀後半には条里区画が完成する。（抜粋）

以上のように屋代遺跡群周辺では、千曲川の流れが緩やかになり、水田可耕地が広がる。こうした条件を利用して弥生時代には水田開発がはじまり、古墳時代前期には有力豪族の存在する地域となり、古代においても兩宮廢寺や条里水田の存在から有力者の存在が推定できるのである。

①……………内陸部に“第二河口”設定

1 下野国寒川郡は海への入り口

古代の下野国寒川郡の領域は、現在の栃木県小山市南部から野木町、そして藤岡町東部の一部を含むと推定されている。⁽¹⁾

平安末期に寒川郡のうち、奴宜郷など思川東岸の部分が寒河御厨として発足し、西岸は寒川郡として残った。北に隣接する小山氏相伝所領である小山郷と一体化して、鎌倉中期には寒河御厨は小山荘と称されたという。

下野国府近傍を経て古代の寒川郡域を貫流した思川は、下野国を抜けて渡良瀬川に至り、現在は利根川から太平洋に達するが、かつては太日川（旧江戸川）に合流して古東京湾に注いだ【図2】。

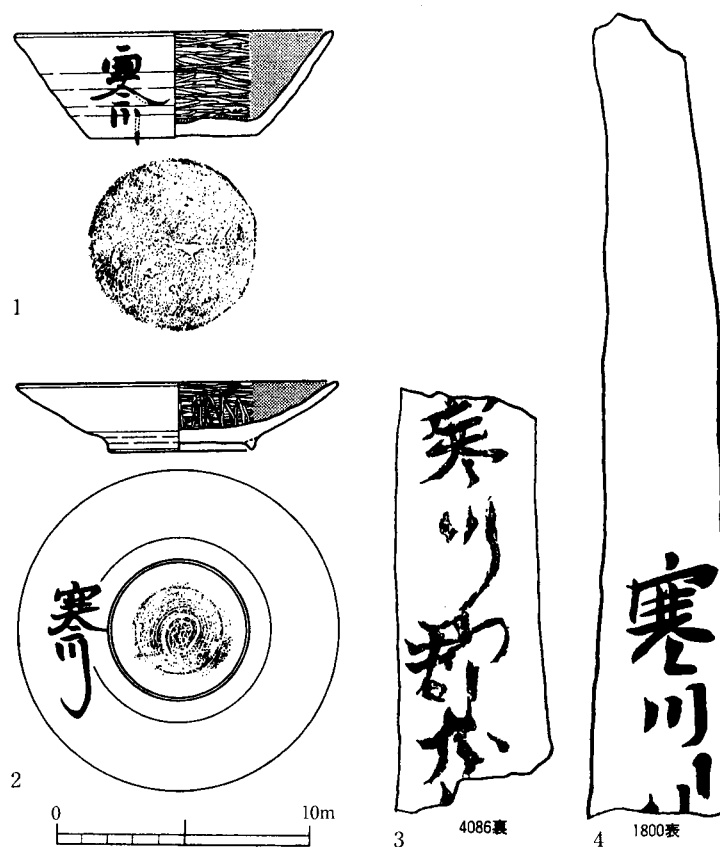
『和名類聚抄』の郷名・池辺郷はかつての赤麻（赤間）沼の縁辺にあったとみられている。現在の赤麻沼遊水池およびその周辺は、渡良瀬川と巴波川・思川に挟まれた地で、当時も赤麻沼の水と原野に恵まれた地であったと推測される。

下野国の寒川郡は、真木・池辺・奴宜のわずか3郷からなる小郡であった。にもかかわらず、下野国府跡や国内各地で「寒川」関係の資料が目立っている。

○下野国府跡木簡【図3】

〔栃木県教育委員会『下野国府跡 VII（本文）木簡・漆紙文書調査報告』1987年〕

1800号 寒川□



1・2 墨書土器「寒川」栃木県湯津上村小松原遺跡
3 木簡「寒川郡□□」栃木県下野国府跡
4 木簡「寒川□」栃木県下野国府跡

図3 文字資料「寒川」の例

○下野国府跡墨書土器

- 32号 「寒□」
- 33号 「寒川厨」
- 34号 「寒」
- 37号 川厨」

○湯津上村小松原遺跡墨書土器

[栃木県教育委員会『県営圃場整備事業地内遺跡発掘調査報告—茶臼塚古墳群・小松原遺跡—』1979年]

- 「寒川」
- 「寒川」

○河内郡南河内町山王山上野原遺跡

- 「寒」

○小山市千駄塚浅間遺跡（寒川郡家跡推定地）墨書土器

「寒川」

「寒厨」

このように、寒川郡が小郡でありながら、その下野国内において広範な活動状況を示すのは、おそらくは次のような存在意義によるであろう。

それは、寒川郡域で思川をはじめとする数多くの河川が集中し、やがて渡良瀬川に至り、太日川に合流して古東京湾に注いでいたことにある。すなわち、東京湾の太日川の河口に対して、ほぼ直線的につながる寒川郡の地は、内陸部ではなく“第二河口”として海上への入り口と位置づけられたと推測される。そこに寒川郡の下野国における重要な存在意義があり、その活動が広範囲にくり広げられたのも、それゆえにであろう。

さらにそのことを裏付けるのが、寒川郡内の二つの式内社の存在であろう。

『延喜式』神名帳に載る寒川郡の神社は、安房神社と胸形神社の二社である【図4】。

安房神社は、房総半島の安房国の式内社安房神社（神名帳には「安房坐神社」とみえる）と、主祭

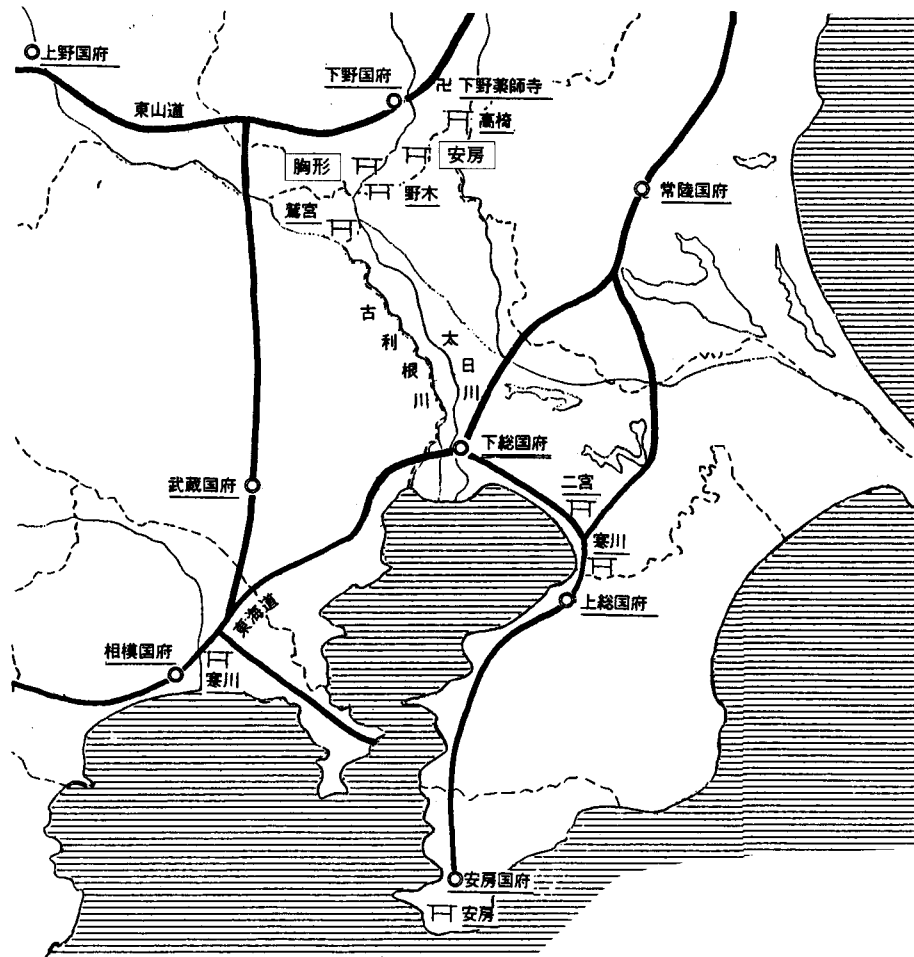


図4 下野国寒川郡 胸形神社・安房神社と太日川
(小山市立博物館企画展図録「下野国寒川郡」より)

神を天太玉命としている点からも同じ神社と判断できる。この安房神社は、海上の神とされている。

胸形神社は、筑前国宗像郡にある式内社宗像神社と同じであり、元来は生業の神であるが、航海守護の神として知られている。

安房神社は小山市栗宮にある安房神社、胸形神社は小山市寒川にある胸形神社に比定される。安房神社は思川、胸形神社は巴波川にそれぞれに接して位置している。

一般的に内陸部と思われる寒川郡内に、海上の神である安房神社と胸形神社の二社を祀ることは、この地が海への入り口として意識され、“第二河口”と位置づけられたことに他ならないであろう。

2 北上川と磐井地方

現在の宮城県石巻市付近は、古代の陸奥国牡鹿郡と称された地域である【図5】⁽²⁾。

『続日本紀』神護景雲3年(769)11月己丑条によれば、牡鹿郡の俘囚大伴部押人らは、もと紀伊国名草郡片岡里人であり、その祖、大伴部直は征夷に赴き、小田郡嶋田村に居したが、その子孫が俘囚の身となってしまった。そこで、俘囚の名を除いて、一般の調庸民と認めてほしいと申請し、許されている。

ここで注目すべき点は、大伴部直が紀伊国名草郡人であることである。名草郡は、『日本書紀』神功皇后の新羅征討物語などに登場する「紀伊水門」の所在地で、有名な紀伊水軍の根拠地である。すなわち、大陸にまで遠征した紀伊水軍は、8世紀以前において征夷事業に赴き、陸奥国北部への海からの出入り口となっていた現在の石巻湾から侵攻したことが推測できる。

このような“海の道”をクローズ・アップすると、やはり『日本書紀』の日本武尊の東征伝承を想起することができよう。

『日本書紀』景行天皇40年己未条によれば、日本武尊は駿河から相模を経て、現東京湾を渡り上総に入った。そして上総から海路陸奥国へ向かい、最終的に北上川河口—現石巻湾—に達したものである。また、仁徳天皇55年のいわゆる田道將軍の伝承は、田道軍が伊寺水門(現石巻港)で蝦夷軍と戦った。この点は、8世紀後半から9世紀にかけての征夷軍と蝦夷軍が内陸部で戦闘を交わしている事実とはきわめて対照的である。このような中央の水軍と蝦夷軍の攻防が水門において行われたことに注目するならば、次のような重要な点を指摘できる。

牡鹿地方の豪族道嶋氏の勢力伸長の基盤も海上交通や水軍との関連を考慮する必要があるだろう。また、牡鹿地方の重要性は、陸奥国北部への海からの玄関口に当たっていた点にあり、8世紀半ばに造営された桃生城は牡鹿柵とともに、その玄関口と、港からさらに北上川水運を利用して北の内陸部—“賊の本拠”とされた胆沢地方—への物資輸送上の重要性を配慮したものと理解できよう。

牡鹿地方の豪族・道嶋嶋足(もとは牡鹿嶋足)の勢力基盤は、北上川の河口を握ったことによるものであろう。この海道を握るということは、海道の入り口である牡鹿と、北上川を北上した内陸部・現岩手県南部一帯をおさえることになるだろう。

天平宝字年間、ちょうど8世紀半ば頃、律令国家は城柵を新たに造営し、強圧的な政策を推進した。その時に、陸奥国の国府多賀城と出羽国の新たな国府である秋田城との連絡路を築き、そ

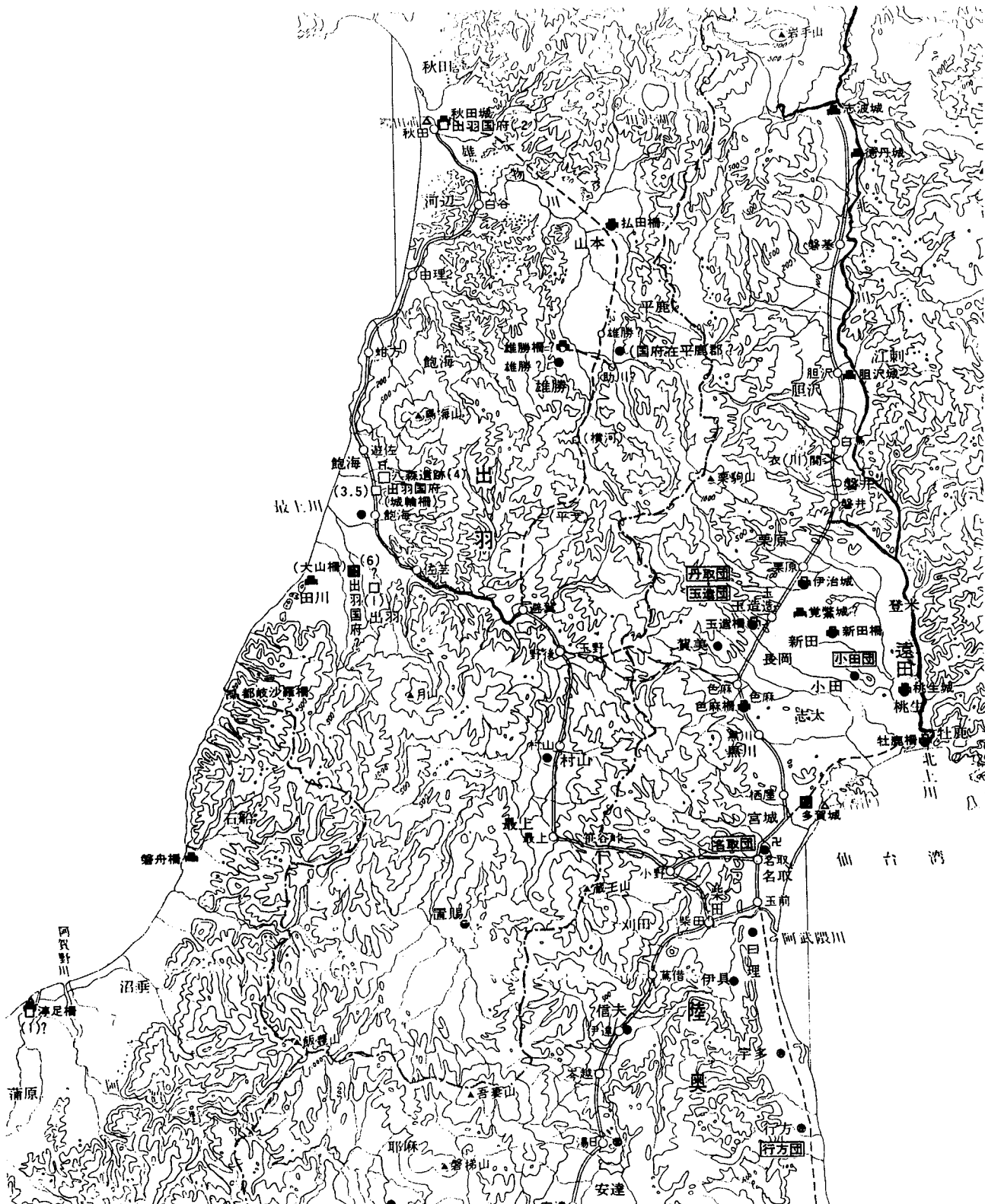


図5 北上川と牡鹿・遠田・碓氷地方および城柵分布図
(柏書房『日本歴史地図 原始・古代編』下より、一部改変)

の中間地点の出羽国の横手盆地内に雄勝城を造営した。一方陸奥国側の北上川の河口部分に、すでにあった牡鹿柵に加えて桃生城を新たに造営したのは、北上川の河口およびその流域一帯を支配するという軍事的・経済的な要請からであったと考えられる。すなわち、律令国家は桃生城を築いた時点では北上川を北上する進取政策を十分意図していたと推測される。そして北上川の水域を国家が掌握するためにここを重要視して、新たな城柵を築いたのである。それゆえに桃生城が天平宝字4年(760)に造営が完成すると、まもない宝亀5年(774)に海道の蝦夷が桃生城の西郭を破るという事件が起きたが、この事件は、北上川流域の海道地域の反対勢力が桃生城の施設を攻撃したと考えられる。

ここで注目されるのは、北上川流域の遠田地域と磐井地域である。遠田郡の郡領は、その名に「田夷」すなわち「田の蝦夷」と冠されていることから、この地域が特異な地であることは明らかであろう。この遠田地域の勢力は、二度三度にわたって彼らが負っている田夷の姓を脱して、公民になりたいという申請をしている。その申請は2回とも征討軍と蝦夷軍の大きな戦いの直後に行われている。すなわち、延暦8年(789)の征東大使の紀古佐美が胆沢の地に攻撃をかけて敗退するという戦いの直後の延暦9年に、それから弘仁2年(811)の征夷將軍文室綿麻呂が爾薩体・閉伊地方、今の岩手県北部から青森県にかけての地域の蝦夷との戦いを強行した直後の弘仁3年にそれぞれ改姓を申請し、許されている。

これは、おそらく二つの戦いで、遠田の勢力が重要な役割を果たしたことに対する、いわゆる恩賞のような形で認められたのであろう。

『日本後紀』弘仁3年9月戊午条によれば、遠田郡の人が「田夷」を脱して、全部で396人の改姓を申請して認められた。そのうちの半数の人たちは遠田連・意薩連・棕椅連・陸奥石原連などというウジ名を与えられるが、その残りのうちの122人という多数の人たちは「陸奥磐井臣」を与えられたのである。

これは遠田郡が海道地域の牡鹿・桃生以北に大きな勢力を持っており、おそらく海道の最終地点が磐井地方であり、遠田と磐井との連関の強さを示しているであろう。すなわち、磐井郡というのは北上川の河口につながるといえる。いわば、磐井地方は、北上川の河口につながる「第二河口」とみなすことができよう。

以上の「第二河口」に加えて、もう一つ重要な視点は、「曳船(ひきふね)」という運行方式である。近世水運では、きわめて盛んであり、具体的にその様相を知ることができるので、まず参考までに近世資料から曳船の方法を紹介しておきたい。

近世の水運における曳船の実態は、富士川通船を例にとるならば、以下になろう。

「富士川治水沿革誌案(明治24年6月内務省土木局技手筆録)」の1章「船体ノ構造及使用概説」によれば、次のように述べられている。

而シテ其^そ浜^{かい}側〔さかのぼること、4,5日を費やした〕スル時ハ、数十丈ノ牽繩二條ヲ用ヒテ、端ハ^{げきしめ}船首〔船は鰻にも作る、ふながしら〕ニ繋ギ、一端ハ毘ヲ為シテ、兩人各々之ヲ胸前ニ掛ケ、カヲ盡シ俯伏シテ^ひ挽ク。一人ハ船ノ前頭ニ在リ、篙〔さお〕ヲ以テ船ヲ^{がい}擬スル〔さまたげる〕モノヲ避ケ、一人ハ水中ニ下リ、大篙ヲ以テ横孔(船首ニ設ケアル丹孔)ヲ貫^{つらぬ}キ、カヲ極メテ之ヲ推ス。^{さかのぼ}浜〔リ〕テ深水ノ所ニ至レバ、則チ船ニ上リテ、短篙ヲ用ユ。

船ヲ挽クモノ險阻ヲ厭ハズ、進ンデ断崖断壁ニ遇ヘバ、則チ牽繩ヲ操リテ、岩石ヲ飛走シ、船ニ跳乗スルコト、宛^{あたか}モ猿猴ノ梢ヲ傳フガ如シ。(抜粹)

川をさかのぼる時、長い牽繩2本の一端をふながしら（艀首）につなぎ、もう片方の2本の縄を船の前方の河岸にいる2人がそれぞれ体に巻き付け、前傾姿勢で力一杯曳くのである。さらに船の先頭にはかじとりが一人乗り、もう一人は大さおを船首の横孔に通して、水中で推し、水深のあるところでは船に乗る方式である。ただし、この方式は急流で知られている富士川の曳船である点に留意する必要がある。

古代においては、具体的な曳船の方法は史料上知ることができないが、曳船が実施されていたことは、史料1で知ることができる。

官符の大意は、次のようになろう。事書によれば、河内・摂津の両国の諸々の牧の牧子が往還する船を妨げることに關する禁制としている。

具体的には公私の牧野は、多く河内国交野・茨田・讃良・洪河・若江の各郡、摂津国嶋上・嶋下・西成の各郡の河畔の地に在り。諸国の雜物を漕運する徒は、河畔沿いに船を牽引している。すなわち曳船である。ところが、河畔の牧子の輩が掠奪する事態が起こって問題となった。

そこで、勅によって国司に下知し、河の近くの地は5丈（約15m）の内に妨げてはいけないこととし、その趣旨を河の付近に勝示し、普く諸人に見知らしめよとしている。

この曳船という方式は、河川の兩岸を完全に統治しておかなければ、昌泰元年（898）の太政官符の淀川の例のように、船荷を略奪されたり、運行を阻止されるなどの妨害行為を受けてしまうのである。

北上川の水運も、牡鹿地方から磐井方面に物資を運搬するのに曳船方式が採られていたとするならば、遠田地方の勢力が延暦9年（790）および弘仁2年（811）の二度の戦闘で重要な役割を果たしたのも、北上川沿岸を支配したからにはほかならないし、磐井地方との結びつきも、あくまでも北上川水運によるものとみて間違いないと考えられるのである。

ところで磐井の地域は、次のような重要な点が指摘できる。

律令政府は長期の征討を経て、延暦21年（802）に胆沢城を造営した。その直後に、駿河・甲斐・相模・武蔵・上総・常陸・信濃・上野・下野国のあわせ

史料1 『類聚三代格』 卷十九 禁制事

太政官符

応^レ禁^レ制河内摂津両国諸牧子等妨^レ往還船事

右公私牧野多在^レ河内国交野茨田讃良洪河若江。摂津国嶋上嶋下西成等郡河畔之地。諸国漕^レ運雜物之徒。就^レ彼縁辺^レ牽^レ引船舫。如^レ聞。牧子之輩無^レ知章程。寄事禁制好致^レ掠奪。因^レ之往来船客河上受^レ冤。羈旅行人途中懷^レ悲。若不^レ懲肅何誠^レ将来。權大納言正三位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣道^良宣。奉^レ勅。宜^レ下^レ知国宰^近河之地五丈之内莫^レ令^レ妨制。慣^レ常不^レ悛以^レ強盜論。国司竟縱不^レ糺量以^レ科処者。両国承知勝^示縁河之地。普令^レ諸人見知。

昌泰元年十一月十一日

太政官符

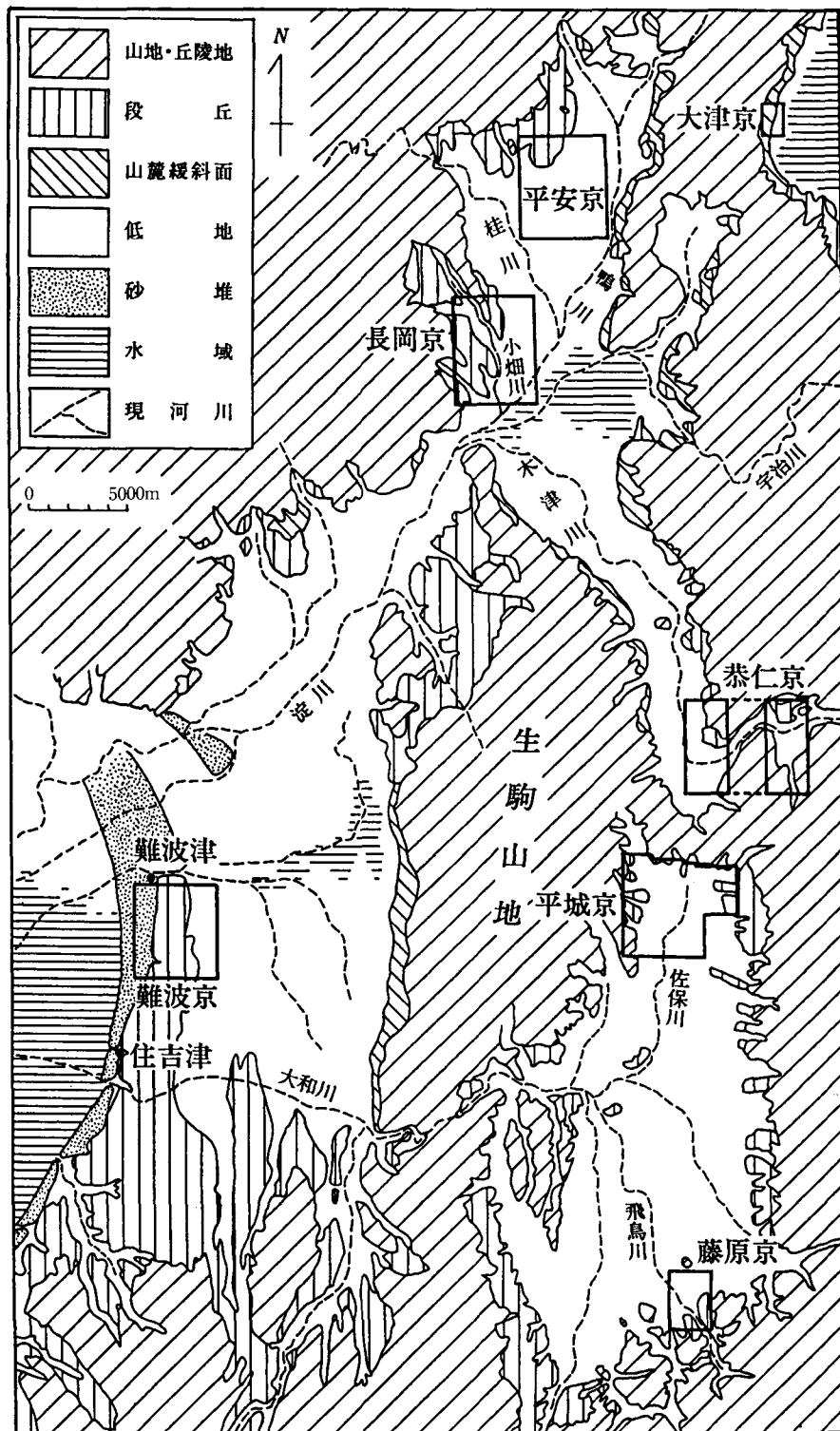


図6 畿内の地形配置と宮都の立地（日下雅義「古代都京の立地環境」
『長岡京古文化論叢』所収 1986年より）

陵の線が南北に走っている【図7】。

桓武天皇は新しい都城を建設するのに、なぜ長岡の地を選んだのであろうか。

その理由として、延暦6年(787)10月の天皇の詔に、「朕、水陸の便を以て、都を此の邑に遷す」とある。長岡京の南郊にある山崎の地は、桂川(葛野川)、宇治川、木津川(泉川)の三河川の合流地であって、そこから下流の淀川の大きな流れは、かなりの大型船舶も就航可能であり、難波との間の交通はいたって便利であった。ただ、東から南にかけて流れる桂川、その支流の羽東師川、西側の小畑川がいずれも氾濫のおそれのある河川であった。

このおそれは、まもなく現実となった。『日本紀略』によると、延暦11年(792)、二度にわたって大洪水にみまわれた。6月の洪水は、雷鳴をともなった大集中豪雨であったと思われる、川の水が大量に流れあふれ出て、その被害は長岡宮の式部省の南門が倒壊するほどであったという。おそらく、京中の民屋はいうまでもなく、他の官庁舎も被害を受けたことであろう。長岡京について詳細な研究を手がけられた小林清氏によれば、6月の洪水は、小畑川の氾濫ではないかと推定している。⁽⁸⁾すなわち、この地方では集中豪雨があると、水は小畑川に流れ込み、下流で氾濫するのが常であって、この小畑川は長岡京の北西部の老坂から西山一帯の水を集め、大内裏の西側を流れ、その後朱雀大路にほぼ沿う形で南北に流れる川である。ふだんは水量の少ない川であるが、集中豪雨をうけると、鉄砲水の形で水勢が強く、沿岸の家屋田地を流出させた。長岡京の西南部は丘陵であるため、この川筋を京域外につけかえることはできないのである。

つづいて8月の洪水は「大雨洪水」と記録にみえ、その2日後に「赤目崎に幸し洪水を覧る」とあることから、葛野川(桂川)の氾濫に間違いない。天皇は赤目崎まで出て桂川の洪水の様子を視察した。この桂川は長岡京南部の山崎で、宇治川・木津川の二大河川と合流し、上流域の近江・伊賀・南山背に大雨が降ると、この合流点付近の水位があがり、長岡京左京流域に逆流する地形になっている。

また葛野川(桂川)は嵐山の下、松尾神社付近で流れを東南に変え、さらに長岡京の東で南南西に方向をかえて、長岡京の左京地域を三方から取り囲むような形になっている。過去の大洪水は松尾付近で決壊し、真南に長岡京左京の中央部へ突入してくる例が多いという。おそらく、延暦11(792)年8月の水害もこの道筋を通して氾濫し、標高15m以下の長岡京左京の8割は被害を蒙ったと推測されている。

こうした見解に対して、当時は長岡京の東南にある巨椋池の水位も低く、葛野川(桂川)流域も今ほどの低湿地ではなかったから、京域が洪水で立ち直れないほどの被害を受けたとは考えられないなどという反論も加えられている。

しかし、長岡京遷都に際して重視された点は、水陸の便であり、なかでもこの河川交通の便である。これを利用することによって、はかりしれないほどの便宜を受けることができるわけである。したがって、長岡京の経営は、この治水事業の成功にかかっていたと言ってよい。

葛野川は、平安京の時にも加茂川とならぶ暴れ川で、「防葛野川使」などを任命して、この川の治水に当たったほどである。この川は丹波山系に水源をもち、普段の流水量は多くないが、上流に集中豪雨が降ると流水量は急激に増加し、流路を変えたりして、幾度も氾濫した記録がある。

したがって、葛野川の治水が重要な鍵となるのである。

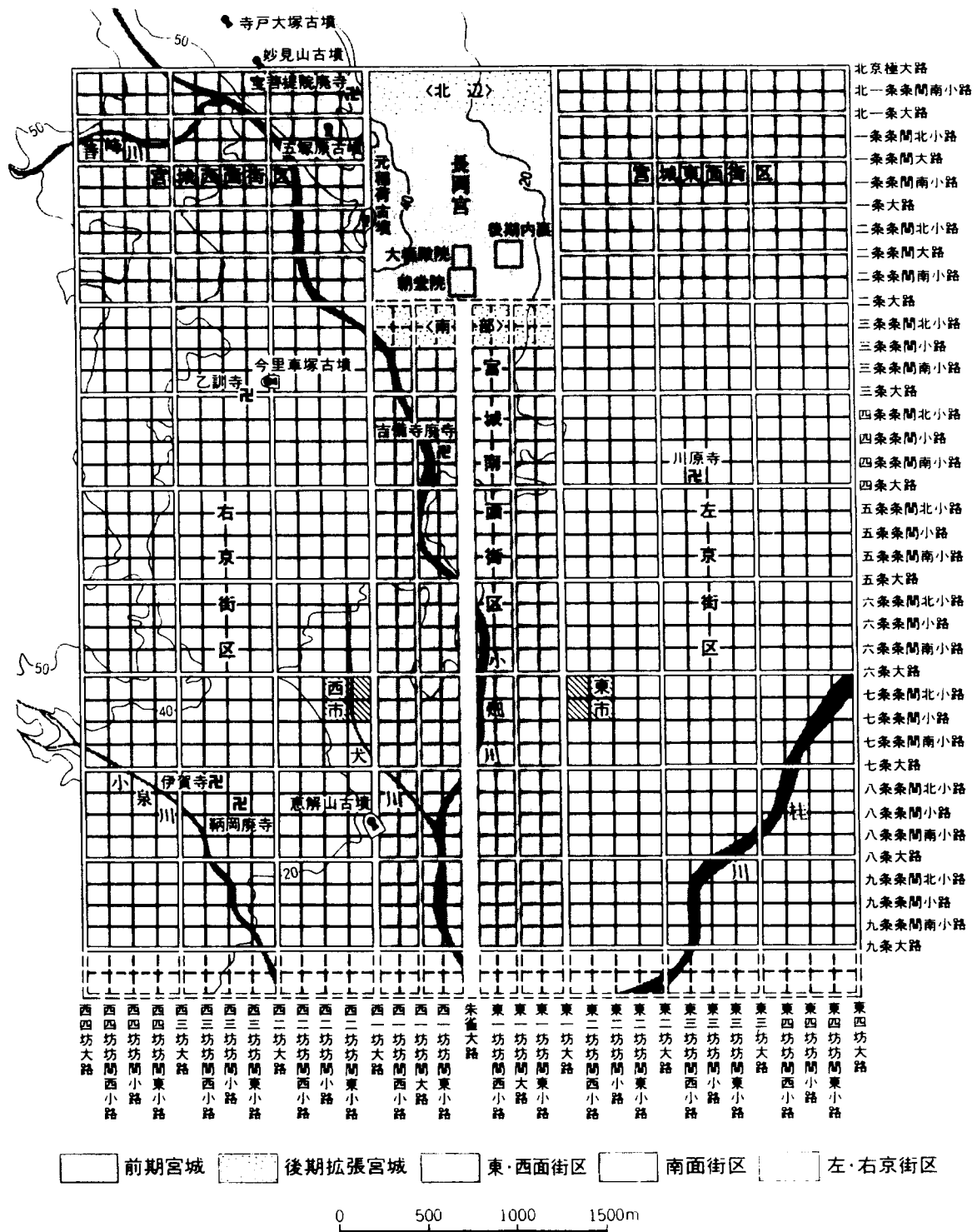


図7 長岡京条坊図 (山中章『長岡京研究序説』2001年より)

これについては、当時すでに、大規模な堰が構築されていた。その堰を築くのに大きな功績があったのは、秦氏である。秦氏は今の淀川中流から上流葛野（京都の地）にかけて住した。その秦氏の祖、秦河勝がその一族を率いて松尾付近に大堰を構築し、防水に功労をたてたというもの、河勝の名はそれに起こるものと言われている。

その後も、秦氏はあいついでこの大堰を補修して氾濫を防いだのである。この大堰は、嵐山の下今の渡月橋の辺から松尾にかけての流れを調節するためであって、嵯峨・松尾の辺りの葛野川を大堰川（大井川）とよんでいるのはそのためであるとされている。今、いくつもの分流が残っているが、葛野川の西を流れる羽束師川などもその一つであろう。

次に、葛野川は長岡京の東南で宇治川・木津川の二大河川と合流し、淀川となるが、この淀川の水量は多く、この高水をいかに防ぐかが重要な問題である。

この淀川の管理状況は、次のような記録によって知ることができる。

まず、延暦3年（784）閏9月、河内国茨田堤が決壊したので、延べ6万人の人夫を投じて築堤工事を行った。翌年正月には、淀川北岸の摂津国^{あじふの}鯉生野（現在の東淀川区の北東部から摂津市にかけての地）などを掘り、三国川を通じて淀川の水を分流する工事を行ったが、これが現在の神崎川である。その9月には、河内国で再び洪水が発生し、10月にも河内国の堤防30ヶ所が決壊し、延べ30万人の大修築工事を行った。さらに、延暦7年（788）3月には、河内・摂津両国の境に川を掘り堤を築き、河内川（平野川）を^{あらはか}荒陵すなわち天王寺の南で上町台地をよこぎり、西の海におとそうとする大工事が和気清麻呂の献策で実施された。現天王寺区の河堀町、^{こぼれぐち}河堀口などの地名はこのときの名残であろうという。しかし延暦18年（799）2月、67歳で亡くなった和気清麻呂の略伝によれば、清麻呂は河内川を掘り、西海に流し、水害を除こうと巨費を投じたが、不成功に終わったとある。

これは当時淀川に合流していた大和川が淀川洪水の一因となっていたので、これを直接大阪湾に流入させようとしたものであろう。しかしこの清麻呂の改修工事の失敗は、淀川下流域の水害を防ぐことができなかったばかりか、増水した上流諸河川の洪水の調整にも失敗し、ひいては、その溢水氾濫から長岡京を防ぐことができなかったのではないか。江戸時代さらに明治以降の数多くの淀川の氾濫は、河内・摂津方面に主として大きな被害をもたらしているが、その中でも、山崎付近の溢水や桂川堤防の決壊が記録されており、この下流の高水現象は、しばしば、山崎付近一帯に大きな影響をもたらしていたようである。

このように、延暦3年（784）11月の長岡京遷都とともに、長岡京への溢水氾濫を防止することと、水運の便を目的とする淀川改修の大工事があいついで実施されたが、たび重なる洪水のために、堤防の決壊が続いた。

そして、ついに先にあげたように延暦11年（792）の二度の大水害が長岡京を襲ったのである。

6月の大水は、式部省の南門が倒壊するような大被害をもたらした。また、8月の大水は京北の大内裏ではなく、京南の方面が洪水にあったようである。

長岡の地に新しい都域を選んだ大きな理由は、水陸交通の便がよいことであつた。言いかえれば、長岡京の地理的条件は全く河川にたよるものであり、長岡京の繁栄は河川の治水にかかっていたと言える。その意味では、延暦11年の二度にわたる大水害は長岡京の廃都問題に大きな影響を与え

たことは明らかである。しかし、この長岡京廃都については、もう少し複雑な事実がかくされているようである。

長岡京に遷都してから、足かけ10年目の延暦12年(793)正月には、新京の地の視察が行われている。いくたの困難を乗り越えて造営をすすめた長岡京を、なぜ10年にも満たないのに廃都としなければならなかったのだろう。この問題は長岡京遷都とともに、歴史上の大きな疑問とされているのである。

その理由については、一般的に、藤原種継暗殺事件に関与したとされて憤死した早良親王の怨霊の恐怖を逃れるためという怨霊説と、延暦11年(792)の長岡京を襲った大洪水被害説の二つの理由のいずれかをもって説明されている。しかし、この二つの理由だけでは、猛反対を押し切って遷都した長岡京をいとも簡単に廃して、新都造営に踏み切る説明としては若干物足りなさをおぼえる。

たしかに早良親王の怨霊に対する桓武天皇の恐れおののきが尋常でなく、身の相つぐ恐ろしい出来事(天皇の親近者の死)に対して、桓武が怨霊の充満する都を逃れ、新しい清浄の地に移りたいと願ったことは容易に想像できよう。新しい都を「平安京」と名づけたのもそうしたわけがあったとされている。

しかし、桓武天皇が怨霊をおそれ、心やすらかでなかったのは、むしろ平安京遷都後の時期であり、晩年の方が強烈であったと思われる。また怨霊を鎮める数々の施策(早良親王に崇道天皇と追号するなど)も平安遷都後に行われている。一方、洪水被害説についても、長岡京占地に際して十分に予測しえたことであろう。延暦11年(792)の二度にわたる洪水が怨霊回避説とともに遷都の一要因となりえても、主たる要因とみなすことはできないであろう。

この主たる要因を明らかにするためには、やはり長岡京遷都そのものの本質的な問いかけが必要ではないか。

長岡京は旧都・平城京を旧勢力の反対を押し切って強引に遷都したもので、そのために延暦4年(785)9月には長岡京造営の推進者藤原種継が暗殺されたのである。長岡京遷都とともに平城京の副都難波京を廃することができたが、平城京廃都は容易ではなかったようである。七十余年間の都である平城京を廃し、いきなり同等またはそれ以上の都城建設を行う余裕は延暦3年(784)当時にはなかったのではないか。そこで、平城京から一旦長岡京に遷都し、規模を縮小し、難波京の廃都材料を用いて造営した。そして、平城京を完全に廃した時点で、念願とする平城京を上回る大都城(平安京)への遷都に着手したのであろう。

このように長岡京は平城京の副都難波京や平城京の資材利用、移建を骨格としている点から考えて、桓武天皇の理想とした新王朝の新都とするのにふさわしいとは言えなかった。中国の強大な皇帝を自らの理想像として追い求めた桓武が、旧都の資材や平城京より縮小された宮都(例えば朝堂院十二堂を八堂に縮小するなど)に満足せず、かなり早い時期に、長岡京はもちろん平城京を上回る規模の新都を計画したのではないか。

しかも、都を営む地は、中国で古くから「四神相応」すなわち四神があるべき方角にかなっている地〔東(青竜)に流水、南(朱雀)に汗池、西(白虎)に長道、北(玄武)に丘陵〕に営むものとされていた。また長岡京の南郊・交野柏原(現・大阪府枚方市、交野市付近)の地で天神を祀るという中国的な方式の郊天の儀を行った。この郊天の儀は、天命をうけて天下を治めている天子が、冬

至すなわち再び日が長くなり始める日の夜半過ぎに京師の南郊に築いてある円丘（のちに天壇）の上で種々の物を供え、牛などの犠牲を焼いて在天の上帝を迎え、謹んで天の命に感謝する意を述べた祭文を読んで天を祭り、併せてその王朝の太祖を天に配して祭る儀式である。

新しい都の地として選ばれた葛野郡は、四神相応の地であり、天神を祀る儀式の場・交野の北に長岡京に引き続き求めうる王城の地であった。また、造営体制も造宮大工が同一人であることなどから、長岡京から平安京への都城設計は基本的に継続していたとみてよい。

このように考えるならば、長岡京の怨霊回避や洪水被害等はその遷都の時期を早めこそすれ、平安遷都の主たる要因ではないことは明らかである。ある意味では、長岡京・平安京両造営事業は一連の造都計画とみなすことができるであろう。

山背盆地の地勢上、河川の水難は、北部より南部が激しく、山にゆくほど緩やかである。この長岡京の真北は葛野川の水路にあたっており、その付近では都城を容れる地形的な余地が全くなく、そこで平安京は予定の地の東に移行させなければならなかった。ただ、東に移行すると、加茂川・高野川という河川があり、この川の治水がまた問題となる。事実、平安京の時代は、この川の治水にかなり苦心したようである。

平安京は、山城盆地の北端に近いところに位置する。古くから「三方を山に囲まれ」とか、「山紫水明」と呼ばれてきたところである。京城は南に向かって緩く傾斜する段丘と扇状地面にひろがっており、平城京の立地環境に近い。京城のうち、東方の一部は鴨川によって、また西南端付近は桂川の東への犯濫によって、しばしば浸水を受けたはずである。平安京造営のころ、鴨川の主流は紫竹付近から相国寺の東に至り、寺町通～川端通間の幅約500mのところを流れていたが、激しい洪水の際には、いくつかの支流が東は下鴨通、西は堀川付近にまでひろがった。造営にあたって流路が固定される一方、周辺部、とりわけ上流部の乱開発が進んだ結果、洪水は一時的に激しさを増し、左右両岸にしばしば溢れたはずである。

2 志波城と徳丹城

志波城【図8・9】

雫石川は脊梁山脈から東進し、雫石盆地を形成するが、鳥泊山と箱ヶ森にはさまれた北の浦付近で急激に流路をせばめられる。この狭窄部をぬけて北上盆地にはいり、北上川に合流する。本遺跡は、狭窄部から東へ約6kmの地点にある。現在の雫石川は遺跡の北約2kmを東流している。狭窄部以東右岸、すなわち本遺跡の位置する地域は、雫石川の旧河道がいくすじも認められる標高131m前後の沖積段丘（砂礫段丘Ⅲ）である。旧河道は明らかに連続する大きなものは4条あり、この他、細かな網状の旧河道も多く観察される。この地域の沖積段丘は常に河川の影響を受けた不安定な地形であったといえる。

本遺跡と徳丹城跡は、ともに沖積段丘面上にあり、旧河道が複雑にはいり込んだ地形に立地している。

志波城跡は延暦22年（803）に坂上大宿禰田村麻呂によって造営された陸奥国最北端の城柵遺跡である。⁽⁹⁾

城跡の基本構造は、一辺約840m方形の築地で区画される外郭線と、その内部の築地で区画さ

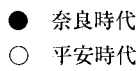


図8 志波城・徳丹城の地形と周辺遺跡分布図（盛岡市教育委員会パンフレット「志波城跡—志波城古代公園—」より）

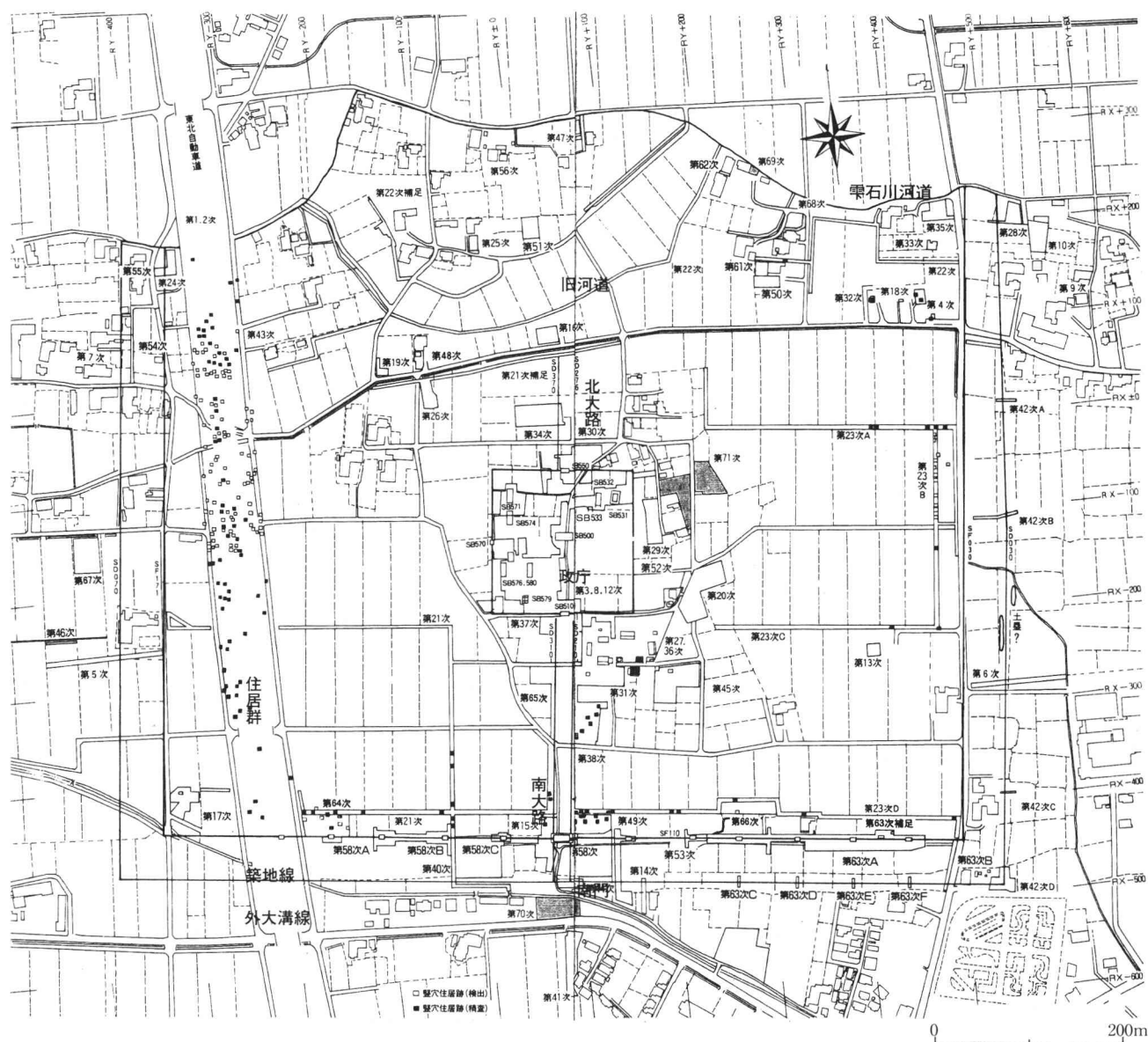


図9 志波城跡全体図（盛岡市教育委員会『志波城跡—平成7年度発掘調査概報—より』）

れる一辺約150m方形の政庁地区からなる。また外郭築地の外約45mに大溝と土塁（大溝線は一辺約930m方形となる）があり、城柵の規模は多賀城に次ぐ規模である。遺構は2期にわたる政庁正殿、西門、官衙建物の一部を除いて他は単期であり、主要建物の柱は抜き取られている。

外郭は築地と外大溝との二重構造を呈するが、東辺は周囲より1mほど高くなっており、道路として古くから利用されてきている。西辺は周囲との比高もあまりなく、古くは幅の狭い畦道のような道路であったという。南辺築地線は、以前より「ドテツパタケ（土手畑）」とよばれていた土塁状の高まりに位置している。

霰石川は、現在まで大きな流れだけでも5回も変遷している。外郭北辺は、霰石川の浸食により削りとられ、残っていない。浸食でできた段丘崖は東西約3kmにわたり、比高0.5～2mの規模で

ある。さらに、弧状の河道もはいり込んでおり、河道の細かな移動が遺跡にも及んだことを示している。

さらに、本遺跡は外郭と内城とが築地で画されているが、遺構埋土の上面を削るように堆積する水成シルトがみられるのは、外郭線と内城の築地外の溝埋土上面に限られている。築地内溝には堆積しておらず、しかも標高の高い西辺と南辺にのみみられ、低い東辺や北辺にみられないのである。このことから、シルトの流入が南西方向からのものであり、その時期は溝がほとんど埋没しおわる時期から築地が大きく崩壊する以前の間と考えられる。さらに少なくとも二度にわたる溝埋土を削るシルトの流入が外郭西辺や内城南辺で確認されており、かなり急激な流入、洪水があったものと判断される。なお、シルトの流入が、外郭築地内溝におよんでおらず、内城築地外溝に流入していることから、外郭築地が堤防としての機能を全うしたとは考えがたい。今後の調査の進展によって築地の欠壊箇所が判明するものとされている。

『日本後紀』弘仁2年(811)閏12月辛丑条によれば、志波城廢絶の事由を史料4のように述べている。

すなわち「それ志波城は河浜に近く屢々水害を被る。須らくはその処を去り、便地に遷し立つべし。伏して望むらくは、二千人を置き、しばらく守衛に充て、その城を遷し訖らば、則ち千人を留め、永く鎮戍となし自余は悉く解却に従わんことを」としている。

これによれば、志波城は延暦22年(803)に建置されてからわずか8年にして移転の議が起こったのである。

志波城跡の発掘調査の結果、掘立柱建物跡の柱は抜き取られたことが多数確認された。また文室綿麻呂の奏言のとおり、志波城の北郭地域一帯が雫石川の浸蝕を受けたり、外郭西辺や内城南辺で、かなり急激な土砂が流入し、大きな洪水を被ったことも確認されているのである。

徳丹城

徳丹城は、北上川右岸の標高106m前後の沖積地に形成された比高差3m前後の砂礫段丘にある【図10】。段丘は、北上川に向かって三角形に突き出す地形を示す。遺跡は志波城の南方約10kmいたった、北上川が東へ大きく蛇行し、その舌状に張り出した右岸約1.5kmのところであった。段丘下には、北上川が増水した際、北上川の流水とは逆に北流する「逆堰(逆さ川)」と呼ばれる河川が入り込んでいる。段丘の北側は小河川によって画され、南側には沖積平野が広がる。この沖積平野は昭和20年代まではたびたび洪水によって冠水した。徳

史料4 『日本後紀』弘仁二年閏十二月辛丑条

閏十二月辛丑。征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言。今官軍一挙。寇賊無遺。事須悉廢鎮兵。永安百姓。而城柵等所納器仗軍糧。其數不少。迄于遷納。不_レ可_レ廢衛。伏望置二千人充其守衛。其志波城。近于河浜。屢被水害。須去其處。遷立_レ便地。伏望置二千人。暫充守衛。遷其城訖。則留千人。永為鎮戍。自余悉從解却。又兵士之設。為備非常。既無遺寇。何置兵士。但_レ辺國之守。不_レ可_レ卒停。伏望置二千人。其_レ余解却。又自_レ寶龜五年。至于当年。惣卅八歲。辺寇屢動。警_レ無_レ絶。丁壯老弱。或疲於征戍。或倦於_レ轉運。百姓窮弊。未得休息。伏望給復四年。殊休疲弊。其鎮兵者。以_レ次差_レ点。輪_レ轉復免者。並許_レ之。

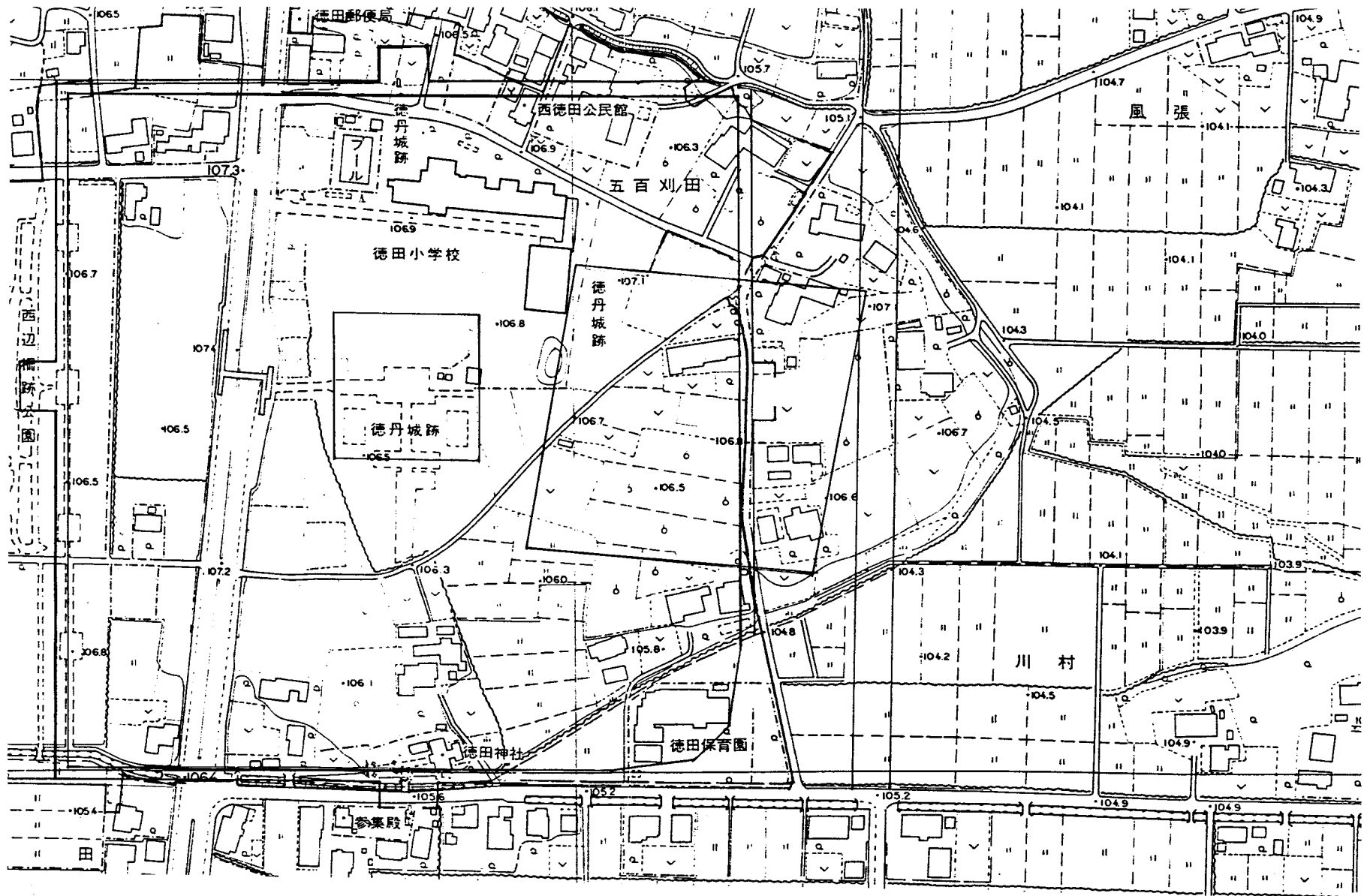


図10 徳丹城跡地形図（矢巾町教育委員会 徳丹城跡現地説明会〈1999.10.30〉資料より）

丹城の中心は段丘の中央部で最も高い所にあるが、一部この沖積地を内包して存在するのである。

城の基本構造は、一辺約 356 m 方形に東・西・南辺が丸太材の柵列で、北辺のみ築地で区画された外郭線と、内部の一本柱列で画される一辺約 75 m 方形の政庁地区からなる。

先にもあげたように『日本後紀』弘仁 2 年（811）閏 12 月辛丑条にみえる征夷將軍文室朝臣綿麻呂の奏言によれば、志波城は水害をしばしば被るという理由から移転の議が起こったのである。その時、城の移転が終わったならば、守衛の鎮兵を二千人から千人に減らすこととしたが、3 ヶ月後の弘仁 3 年 4 月 2 日の太政官符に「鎮兵の数、減定すでに完了した」とあり、志波城の移転を終えたことをうかがわせる記事がある。

志波城は、水害記事を最後に史料上からはその名を消し、代わって弘仁 5 年（814）に初めて徳丹城の名が史料上に登場してくるのである。このことから、徳丹城は志波城を遷し立てた城柵と考えられている。

近年の徳丹城跡の発掘調査成果⁽¹⁰⁾によれば、従来知られていた徳丹城の本格造営以前に、一辺約 150 m の大溝（地山面で上幅約 2.9 m）で四角（正しくはやや菱形）に区画された数棟の掘立柱建物で構成された一郭が確認された【図 11】。溝の方位は南北溝で約 10～11 度東へ偏し、東西溝で約 5～6 度南に振れている。なお、一辺約 150 m 四方の施設は、外郭東門近くに位置し、しかもその規模は志波城の内城とされる政庁地区と同じである点、まことに興味深い。

徳丹城跡の発掘調査で 3 点の注目すべき事実が判明した。

第 1 点は、徳丹城の官衙群は、西部地区に比して、東部地区さらに限定すれば、外郭東門の内外付近に多数の建物跡が密集して検出されている。

第 2 点は、外郭東門の位置する地区は地形的に沖積台地が舌状に突き出しており、しかも外郭東門跡は外郭線のなかで最後まで開口していたことが判明している。

第 3 点は、その舌状の先端部の位置にとり付くように現在も水路が東に伸び、約 400 m ほどのところで「逆堰」を経て、北上川に通じている。現在の細い水路よりも幅広い水田地割が沖積低地に確認でき、それは運河状の遺構と判断できる。

2000 年に実施した第 49 次発掘調査⁽¹¹⁾は、その運河状遺構確認のために沖積台地の取り付け部分と東に約 200 m 付近の水路部分を発掘調査した【図 12】。その結果、台地取り付け部分では、近世以降の水路と重なっているが、その下層に推定幅約 15 m の人工掘削した運河状遺構を検出した。また、その地点から東約 200 m 付近でも、明瞭に運河状遺構の北側一部を確認した。

以上の調査結果を踏まえて現段階で推測するならば、志波城が弘仁 2 年に水害をしばしば被ったという理由で廃城し、移転の議が起こり、志波城の南、より安定した沖積台地上に、まず創建期以前の志波城の政庁域と全く同じ規模の約 150 m の区画溝で囲まれた簡易な政庁域を造営し、移転に伴う志波城の政務を停滞させることなく遂行しようとした。その後、いわば仮設的な徳丹城に代わって本格的な徳丹城が造営された。その建築材には志波城の建物の廃材を利用したと考えられている。

志波城の発掘調査では、ほとんどの柱は抜き取られて解体されている。これは“旧材を以て充てる”ためであり、徳丹城では「由北角柱」と刀子で刻まれた柱が外郭西門の北東角から出土し、そ

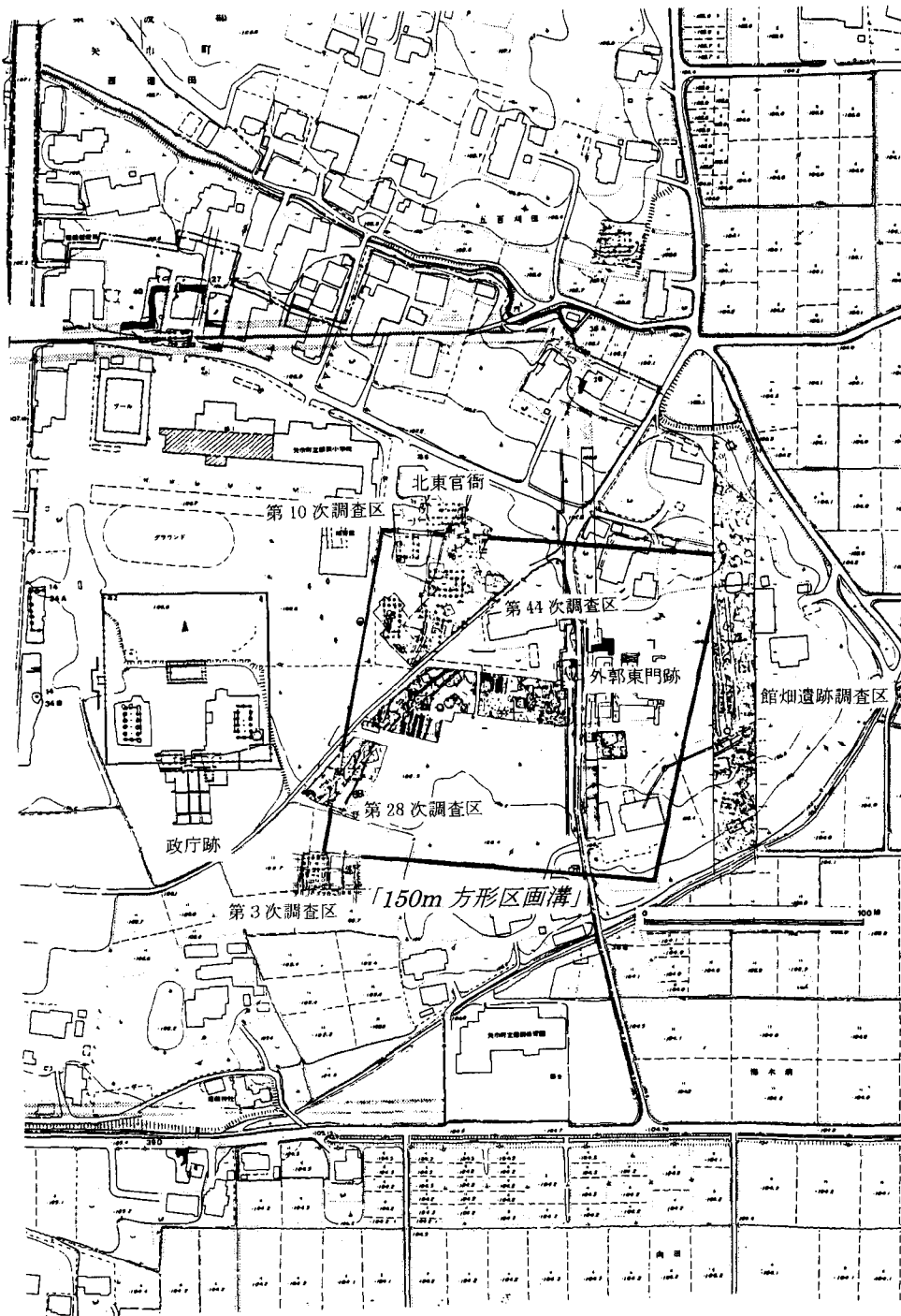


図11 徳丹城跡外郭東門地区・館畑遺跡遺構配置図
(第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料より)

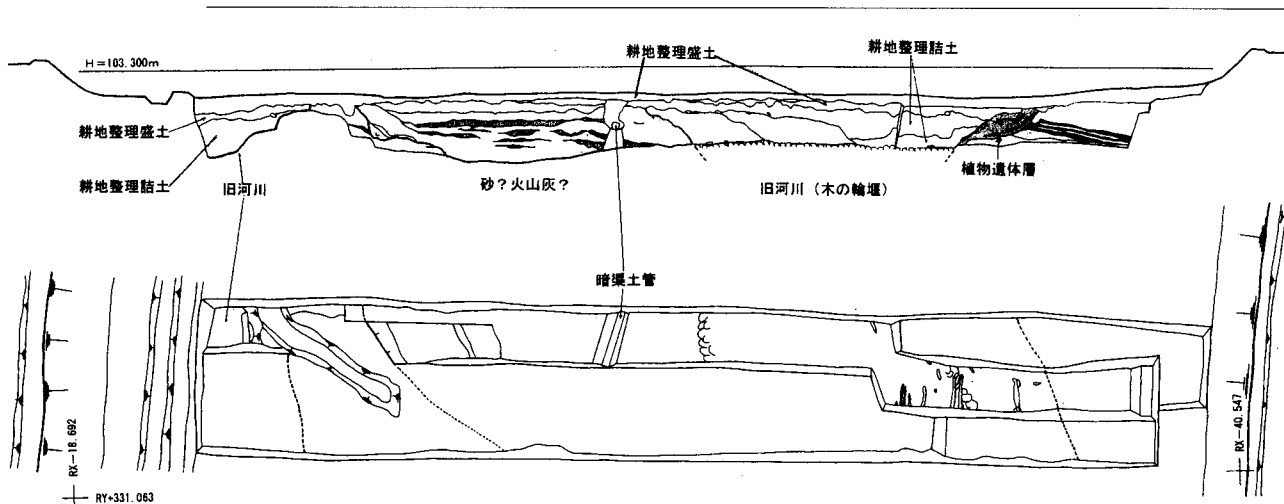


図12 徳丹城跡・運河跡 第49次-A地区(矢巾町教育委員会
『徳丹城跡—第49次発掘調査—』より)

れを裏付けている。これら志波城で解体された材木は、いかにに組まれ、雫石川から北上川そして逆堰へ流され、さらに外郭東門付近まで運河を通じて漕運し、外郭東門から徳丹城内に運び込んだのであろう。外郭東門を最後まで開口しておいた理由もそのためであると推測される。こうした方式は先にあげた長岡京遷都と難波宮の廃材を淀川から運漕し、さらに小畑川によって京内に運び入れた方式と酷似しているといえよう。

ここで改めて志波城移転と徳丹城造営の実相に触れてみたい。

まず、志波城移転は、弘仁2年(811)の文室朝臣綿麻呂の爾薩体・幣伊2村の蝦夷征討事業直後の施策である点に注目すべきである。おそらくは志波城の東部および北部に広く勢力を誇った爾薩体・幣伊2村さらには出羽国側の不穏な動きから志波城を維持することは困難であると判断して南へ移転を余儀なくされたと考えられる。すなわち、志波城造営当初は律令国家の版図の最北端近くしかも出羽国への連絡路確保のために、志波城の地まで北上させたが、結局は短期間に撤退せざるをえなかったのである。特に志波城の北方からの侵攻に対して、北辺築地を雫石川の氾濫などで浸蝕削平されたことは、移転の大きな要因とはなったであろう。このことは、移転した徳丹城の外郭線が東・西・南の三辺がいわば簡易な丸太材柵列であるのに対して、北辺のみ築地堀で厳重に構築したことは、北方の反対勢力の侵攻に対する防備意識と理解できるであろう。

志波城は、律令国家の東北支配の拠点を胆沢城の造営に引き続いて、さらに北に設けたものである。

『続日本紀』宝亀7年(776)5月戊子条に「出羽国志波村賊」が叛逆したという記事があり、少なくとも8世紀後半には志波村を中心とした地域が出羽国司管掌下にあった可能性が指摘されている。「志波村」が一時期出羽国に属していたとすると、「志波村賊」を「狄」と称していた可能性がある。

「狄」の用例に着目すると、「津軽狄俘」(『日本後紀』弘仁5年<814>11月己丑条)、「渡嶋狄」(『日本後紀』弘仁元年<814>10月甲午条)など、津軽以北の地域に対しても「狄」の呼称が使われていたことが知られている。

以上のことから、志波城は東夷ではなく、北狄に対する城柵と位置づけられていたと考えられる。そのために、志波城は陸奥国の最北端そして出羽国へ直結する地点として現盛岡市西郊、しかも奥

羽山脈から東流し、北上川に注ぐ雫石川右岸上に設置したのである。すなわち、出羽国に通ずる雫石川流域に設け、洪水による災害を十分に予知の上で、あえてこの地を選んだと推測される。

前述したように難波京の廃材を淀川を利用して長岡京造営のために漕送したように、志波城の北部が水害を被ると、その廃材を北上川を利用して徳丹城造営のために運漕している。

結局のところ、宮都・長岡京も最北の城柵・志波城も、ともにその施設に河川を取り込んで水運を特色としたが、それは同時に洪水の危険性を回避することはできなかったのである。

③……………「津司」と「津長」

1 「津司」——金沢市畝田・寺中遺跡⁽¹²⁾

畝田・寺中遺跡は、金沢市畝田西3丁目地内に拡がる、古墳時代から古代の遺跡である【図13】。遺跡の標高は1.5m前後で、犀川と大徳川に挟まれた微高地上に立地する。犀川および大野川によって形成された低地帯には、本遺跡の他にも多くの古代の遺跡が展開している。

1999年度の発掘調査の結果、主な遺構として古墳時代の大溝、奈良時代の河跡、木簡を出土した31号大溝などが検出されている。河跡を中心に、多量の土器・木製品などが出土しているが、特に注目すべき遺物として次の2点があげられる。

(1)「津司」墨書土器【図14】

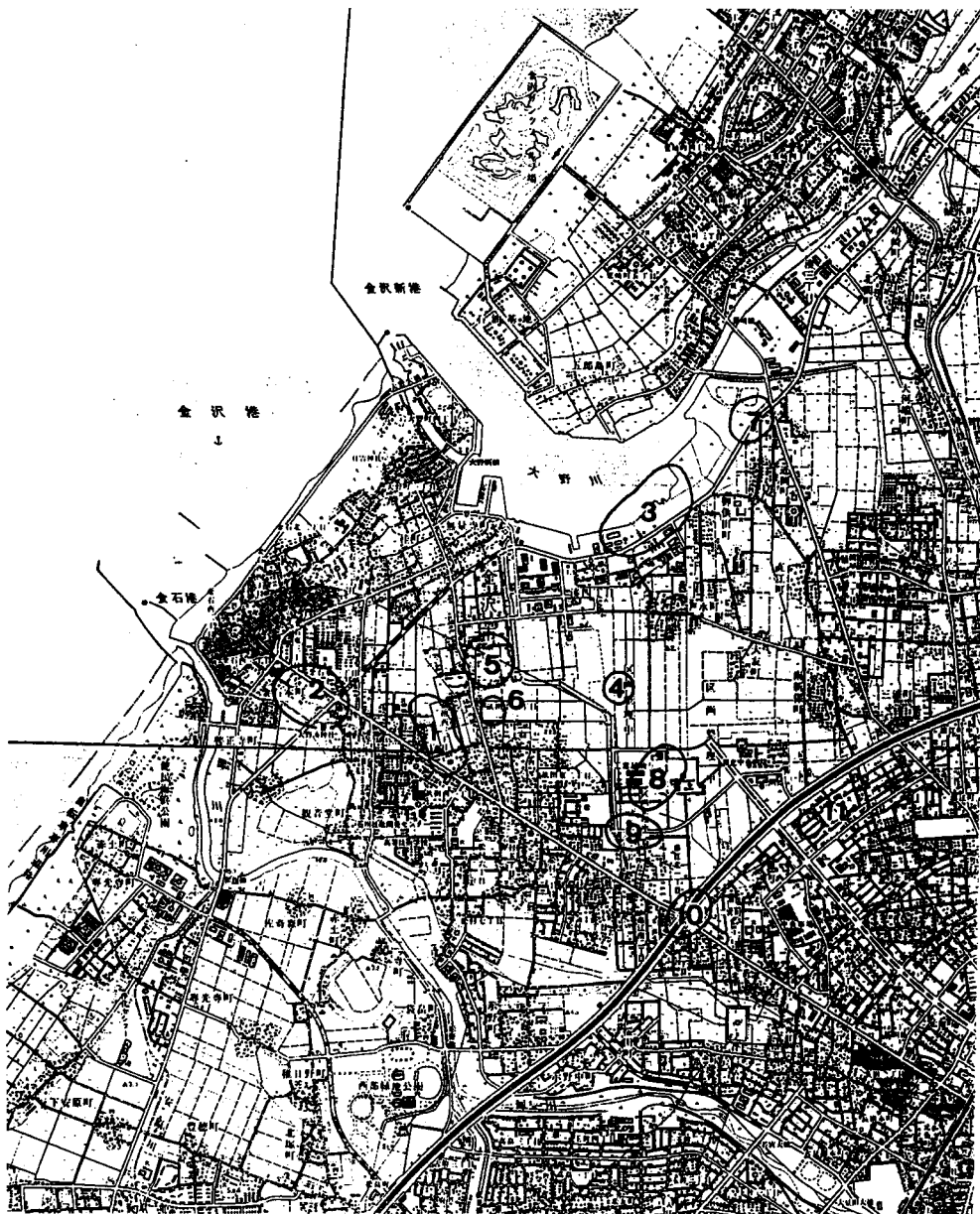
奈良時代の河跡から出土し、8世紀中頃の坏の底部に「津司」と墨書されている。他に31号大溝からも「津」と墨書された8世紀の土器が5点出土している。

奈良時代における「津司」という職名は、『続日本紀』養老4年(720)正月丙子条の「渡嶋津輕津司従七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨国に遣して、その風俗を觀しむ」という記事が唯一の史料である。この記事は、渤海国(698～926年)の建国など変動する大陸北部に津司を派遣してその情勢を視察させたことを伝える史料であり、津司の職掌が港湾の管理だけでなく、外交にも及ぶことがあったことを示している。畝田・寺中遺跡で出土した「津司」「津」の墨書土器は、8世紀中葉には周辺に港湾関係の施設があったことを裏付ける資料と考えられる。越前国加賀郡では、天平2年(730)に第1次遣渤海使の引田朝臣虫麻呂が着岸した(『続日本紀』天平2年8月辛亥条)のを初めてとして、渤海国の使節を乗せた船が5回来着している。墨書土器「津司」と共伴の墨書土器のなかに、「天平二年」と記されたものが認められる。天平2年の第1次遣渤海使の帰着の際に、津司において饗応した食器に紀年銘を記したとも解される。

いずれにしても、加賀郡の管轄する津司は郡津としての機能の他に、渤海使節との接待など外交的業務を負った可能性も考えられる。

(2) 出挙関係木簡【図15】

冒頭に年号「天平勝宝四年」(752)を記し、以下、11人分の人名+稲の数量が記されていることから、本木簡は出挙関係木簡とみなすことができる。小計された7人のうち、墨の遺存状況が良



	遺 跡 名	遺跡の時期（古代）	備 考
1	畝田・寺中遺跡	8世紀～9世紀	
2	金石本町遺跡	7・8世紀～9世紀	郡津推定地
3	戸水C遺跡	8世紀後半～10世紀	国府津推定地
4	戸水大西遺跡	8世紀後半～9世紀	「宿家」墨書土器
5	畝田B遺跡	9世紀	
6	畝田・無量寺遺跡	8世紀後半～10世紀前半	「庄」「市」墨書土器
7	近岡遺跡	9世紀後半	木簡、木製人形
8	戸水B遺跡	8世紀後半～9世紀	「館」墨書土器
9	藤江C遺跡	8世紀後半～9世紀	初期庄園施設？
10	藤江B遺跡	8世紀中頃～9世紀	「石田庄」墨書土器
11	西念・南新保遺跡	8世紀後半～9世紀	人名主体の墨書土器

図 13 金沢市畝田・寺中遺跡周辺の地形と遺跡 S = 1/50,000

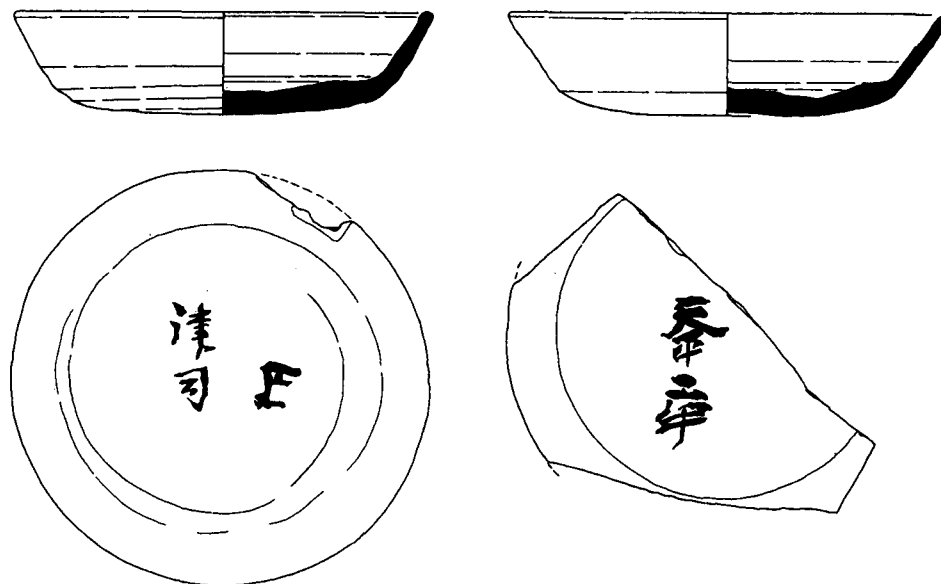


図14 金沢市畝田・寺中遺跡 ASD008 出土墨書土器「津司」「天平二年」

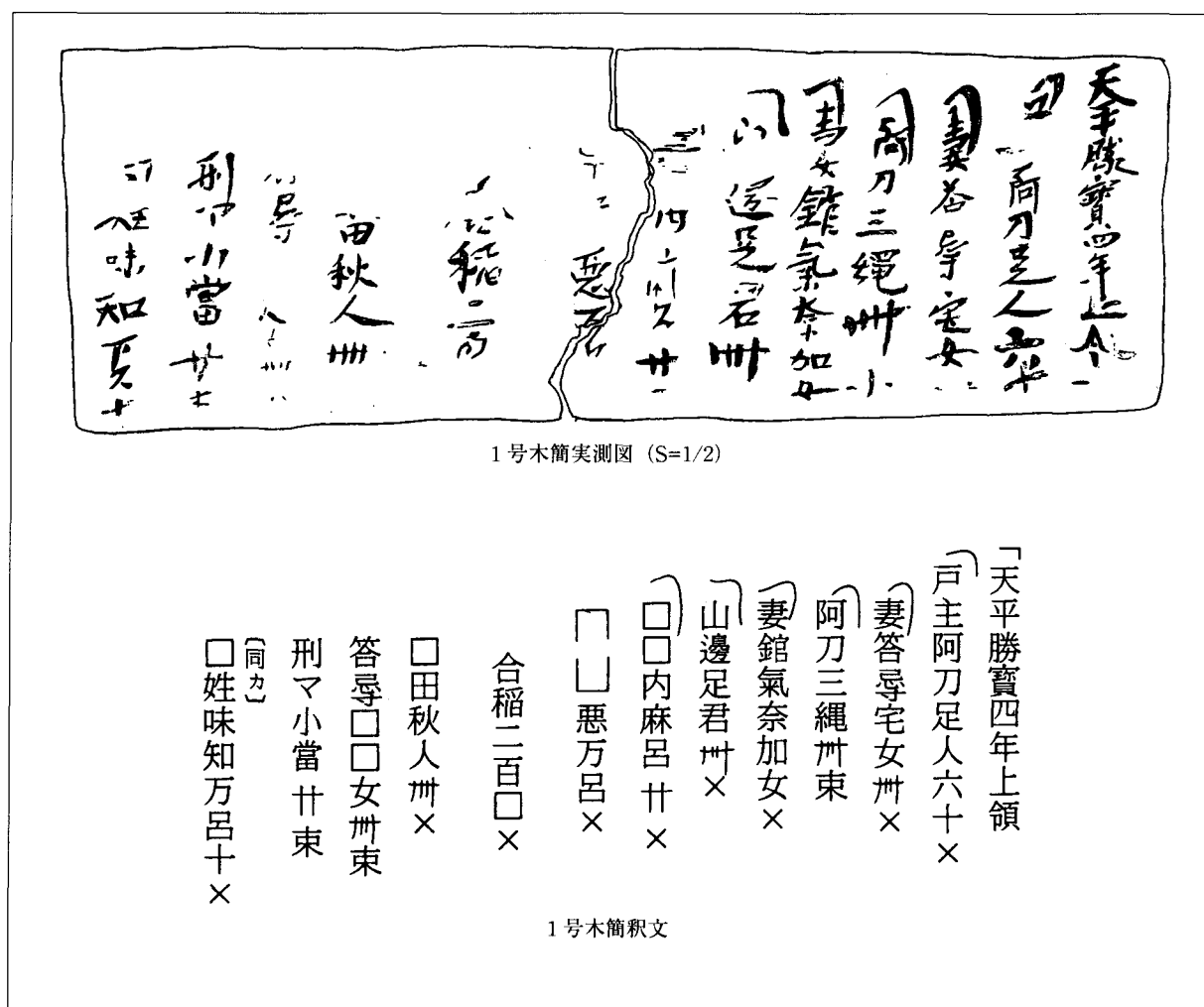


図15 金沢市畝田・寺中遺跡出土出挙木簡

好でない2人を除く5人の人名の上に合点が付されている（おそらくは、倉庫への収納の際のチェックか）ことから、出挙収納に関わるものとみられる。末尾に記された4人は、一段下げて記され、しかも合点がないことから、未納者と判断できる。本木簡の特色は、籍帳そのままの記載様式であり、「戸主阿刀足人」の戸単位に課せられた出挙に関わる記録簡として、きわめて貴重な資料である。

おそらくは、本木簡は郡司の支配する郡津経営のために、一定の本稲が郡津に分配され、津司はそれを周辺の民に出挙し、それを秋に収納した際に、戸別に収納と未納者を記録した札と考えられる。

加賀郡家は、最近確認された小立野台地先端部、金沢城の南側の広坂遺跡（加賀郡家付属寺院推定地）周辺と想定できる。その郡家の流通センターとして、犀川河口周辺域に郡津が設定され、津司が管理運用していた実態が明らかになってきたと推測できるのである。

2 「津長」——福島県いわき市荒田目条里遺跡⁽¹³⁾【図16】

荒田目条里遺跡は、福島県いわき市平菅波地内に所在する。夏井川下流の右岸に位置し、太平洋の海岸より西へ約2.5 kmの所にある。夏井川下流域の海岸平野には、現海岸線を除いて、4列の浜堤列が認められる。最終氷期が終わり、海進に転じ、5000年前頃から海進がすすむ中で第1～第4浜堤が形成された。第1浜堤は4500年前に、第2浜堤は3900年以前に、現海岸線は1800年までに形成された。遺跡の西方約150 mに延喜式内社の大国魂神社がある。大国魂神社の立地する丘陵の東斜面は弧状をなし、急斜面で海蝕崖である。同神社の南に位置する字砂畑・新屋敷の集落の位置する微高地は浜堤で海岸線に平行に走る低い砂丘である。これが第1浜堤であって縄文海進期の海岸線を示している。第2列の浜堤はやや複雑な形をしているが、上大越の石崎付近と思われる。荒田目の北部にある田中内北、鼠内は夏井川の自然堤防である。これら第1浜堤、第2浜堤、自然堤防に囲まれた後背低湿地が条里制地割の水田である。

現在の土地割と地籍図による復原図を比較すると、明治30年代の耕地整理は大規模な改変ではなく、基本的には条里制地割を踏襲している。すなわち、東西方向の道路や水路が109 m間隔に平行に走り、南北方向も一部を除き、条里の線を引き継いでいる。これらの水田の灌漑は、少し離れた谷頭部にある太郎作入溜池、南作上池、菅波入溜池などに溜池を作り、灌漑水路を使用してなされた。

ところで、本遺跡の南東方向へ約1.5 kmの所に磐城郡家の中心施設と比定される根岸遺跡がある。根岸遺跡は太平洋の現海岸線から西へ約1.4 kmの台地上にある。台地上からは、正倉院およびその東側には郡庁院の中核地区が存在していることが確認された。

荒田目条里遺跡は、いわき市の中心地である平^{たいら}から東へ4 km、夏井川の河口から約3 km西方の右岸の沖積地上に位置し、荒田目条里制遺構のほぼ中央部にある浜堤の裾部、条里制遺構がある低湿地との境目に立地している。条里制遺構は、東西約600 m、南北約1,100 mの規模である。

1993年に調査された荒田目条里遺跡は、調査範囲1,800 m²とわずかであるが、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、古代の河川を含む溝跡8条、古代から近世の土壌18基が検出された。

遺物の大半が出土した河川跡（第3号溝跡）は、調査範囲の北側部に、ほぼ西から東に向かって流れるかたちで発見された。河川は、幅16 m以上であり、深さ1～2.5 mほどである。この河川の



図 16 いわき市荒田目条里遺跡位置図 (いわき市教育委員会 いわき市埋蔵文化財調査報告 72『根岸遺跡』2000年より)

機能した時期は、古墳時代中期から平安時代にかけてのものである。この河川跡の中から祭祀遺物を中心に多数の遺物が出土した。

発見された遺物は、その大半が古墳時代から平安時代にかけての約 10 万点におよぶ土器である。これらの土器のなかに、人面墨書土器と、200 点を越す墨書土器が含まれている。石器・石製品は剣形・鏡形の滑石製模造品などが 77 点、土製品では、手捏土器・土玉・土錘・土馬・船形土製品など 64 点、金属製品では紡錘車・手斧・馬具・刀子など 15 点、また、木製品では、木簡 38 点、絵馬 3 点、人・馬・弓・矢などを模したものや、碗・皿・定規・下駄・曲物など、合わせて 400 点出土している。なお、低湿地のため胡桃・桃・梅・しうびなどの種や馬骨などが数多く出土している。

荒田日条里遺跡から出土した木簡は、38点を数えるが、そのうち、特に1号木簡が注目される【図17】。

本木簡は紙の符式文書のうち、必要項目のみを簡略に記載した木簡独自の様式となっている。

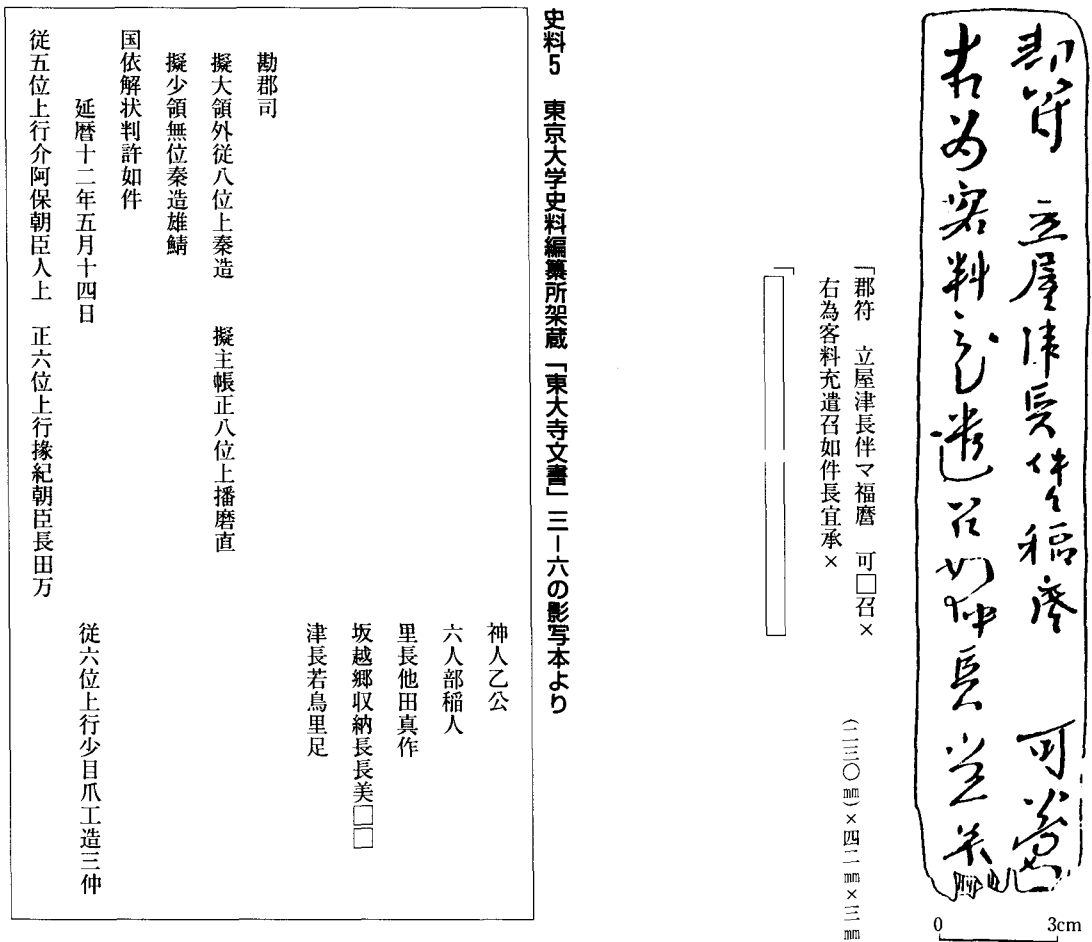


図 17 荒田目条里遺跡出土郡符木簡実測図（いわき市教育文化事業団作成）

差出は磐城郡司、宛所は「立屋津長伴マ福磨」，「可□召」以下は事書部分に相当し、欠損部分に召喚される人々の歴名が記載されているであろう。左行は書き止め文言部分とみることができる。

本木簡は、郡司から立屋津長伴マ福磨に人の召喚を下達した文書である。下端欠損のために詳細は不明であるが、郡司から津長に符が下され、津の来客のために、津長の管理下の船をあやつるかじとりや水手、または雑役に従事する津の周辺の人々などが徴発されたと考えられる。本木簡でいえば、宛所は「立屋津長伴マ福磨」、これまでの郡符木簡においても、その大きな特徴は、郡符は宛所がそれぞれの官司または官司の責任者であり、その下達の内容は人の召喚に関わるものである。

津長に関する史料は、延暦 12（793）年 5 月 14 日付けの東大寺文書中の「津長若鳥里足」の 1 例のみしか知られていない。

おそらく津長は外洋船でやってきた国司などの“客人”を「立屋津」（おそらく夏井川の河口からさかのぼった地点であろう、具体的には比定地不明）に迎え、ここで船底の浅い川船に乗り換えて、夏井川から運河状の河川に進んだのであろう。そして津長に率いられた人々が、運河状の河川をさかのぼって本遺跡の地で、郡家の役人が召喚人と木簡との照合を行って、のちに木簡を投棄したと推測される。

この木簡の発見により、地方の有力者であった郡司による津の支配が明らかとなり、優勢を誇った磐城郡司の政治的・経済的活動の拠点が津にあったことも推測できる点、きわめて重要な意義がある。

④……………新興豪族の居館も河川沿いに船着場を設営

1 新潟県和島村門新遺跡⁽¹⁴⁾【図18】

門新遺跡は、新潟県三島郡和島村に所在する。和島村の地形は、三島山地から派生する東側丘陵・島崎川低地・海岸に面した西側丘陵の、3種に大きく分類され、門新遺跡はこの中の島崎川低地に位置し、遺跡周辺は昭和20年代の耕地整理まで畑地が点在し、長雨による湛水に際しても带状に水が掛からない微高地であった。

この高まりの性格は、1993～94年の国道116号バイパス建設・県営圃場整備事業に伴う発掘調査で、微高地の中央部を縦貫して河道跡が発見されたことから、いわゆる自然堤防と推定される。この旧河道は、旧島崎川あるいは荒巻・三瀬ヶ谷からの出水が集まったものの可能性があり、1993年度の調査結果から、古墳時代から近世にかけて若干東西に振られながらも、ほぼ同じ位置を流れていたことが明らかになっている。古墳時代から平安時代の段階は、川幅が広く堆積物が粗砂で構成されるなど、流量の豊富さがうかがえるのに対して、近世の河道は、流路がかなり浅くなり、堆積物も有機質に富む黒色粘土に変化していることから、水が停滞しがちな淀みのような状態であったらしく、近世末期には消滅していたものと考えられる。

和島村の所在する島崎川流域は、古代において古志郡に属しており、製鉄跡や須恵器窯跡などの生産遺跡が多く分布する。また『延喜式』神名帳に記載された古志郡6座のうち3座が流域内に集中し、7世紀後半の白鳳期に創建された横滝山廃寺が所在し、さらに古代官衙関連の八幡林・下ノ西遺跡などの存在から古志郡の中核地域であったと考えられる。

八幡林遺跡は8世紀前半～10世紀初頭にかけて機能した官衙遺跡であり、遺構と多量に出土した文字資料の内容から、古志郡家あるいは古志郡司の大領（長官）に関わる施設ととらえられており、8世紀前半には城柵または関機能を有していた国レベルの施設も併置されていたとされる。また「大家驛」と記された墨書土器の出土から、同駅が八幡林遺跡に近接して存在し、北陸道は従来考えられていた海岸ルートではなく、島崎川沿いのコースをとることが確実となった。八幡林遺跡は9世紀中頃を境に急速に衰退し、10世紀前半には機能を停止した。

この八幡林遺跡の南東800mに下ノ西遺跡が1997年に発見された。下ノ西遺跡は、島崎川低地の微高地に位置し、北側には島崎川・小島谷川・梅田川の合流点を控え、北陸道が付近を通過するなど、水・陸上交通の要衝の地に立地する。下ノ西遺跡の範囲は、試掘および表面採集調査の結果、南北200m、東西350mの7万m²に及ぶものと推定される。

検出された遺構には、掘立柱建物（最大で桁行7間）22棟、1本柱列4条、道路、井戸3基などがあり、共伴遺物から8世紀前半～10世紀前半にかけて構築されたものと推定される。遺跡の具体的な性格については、存続期間がほぼ重なる八幡林遺跡に欠如している機能を補う、郡家関連

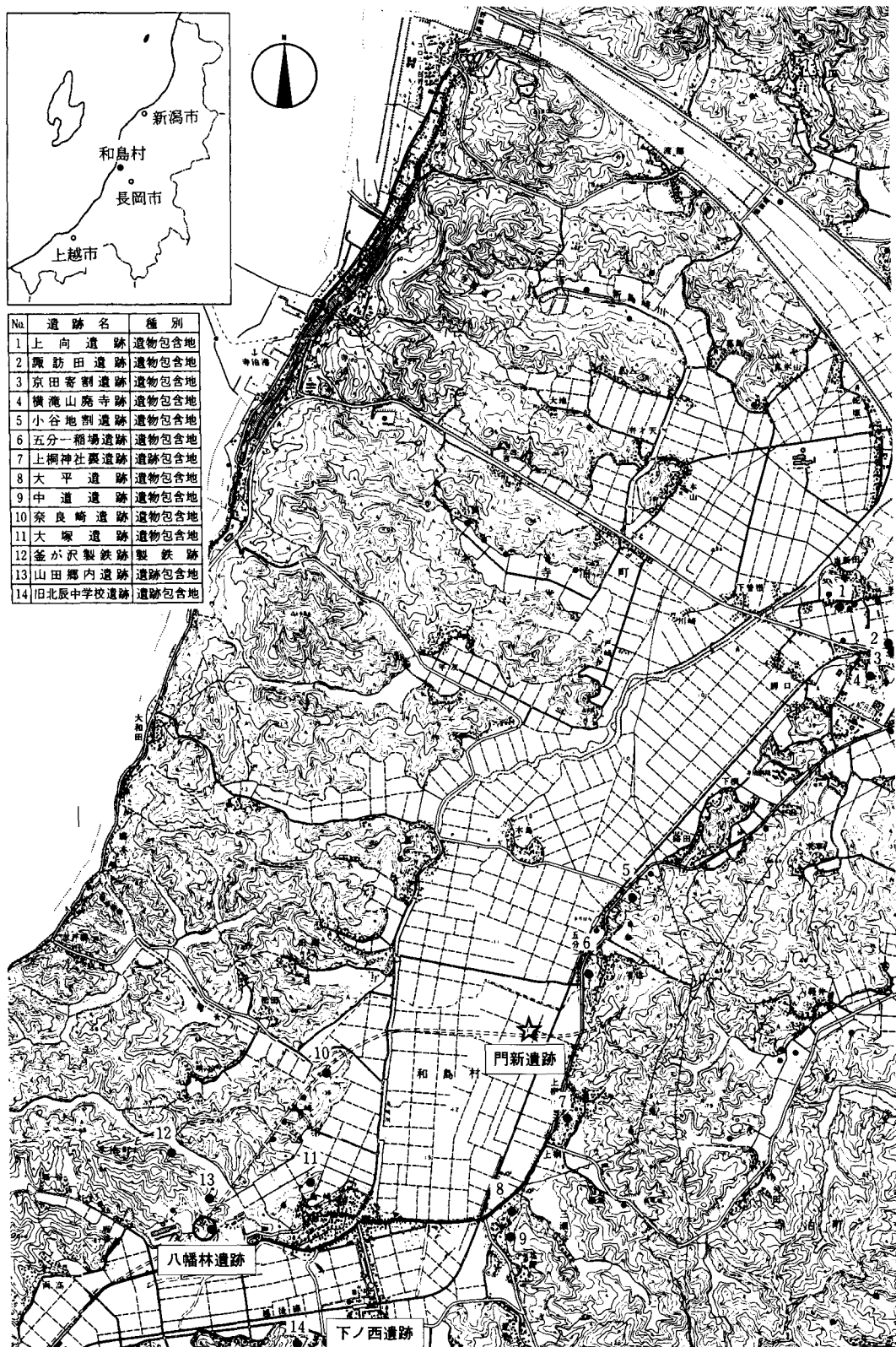


図 18 新潟県門新遺跡とその周辺（新潟県和島村教育委員会『門新遺跡』1995年より）

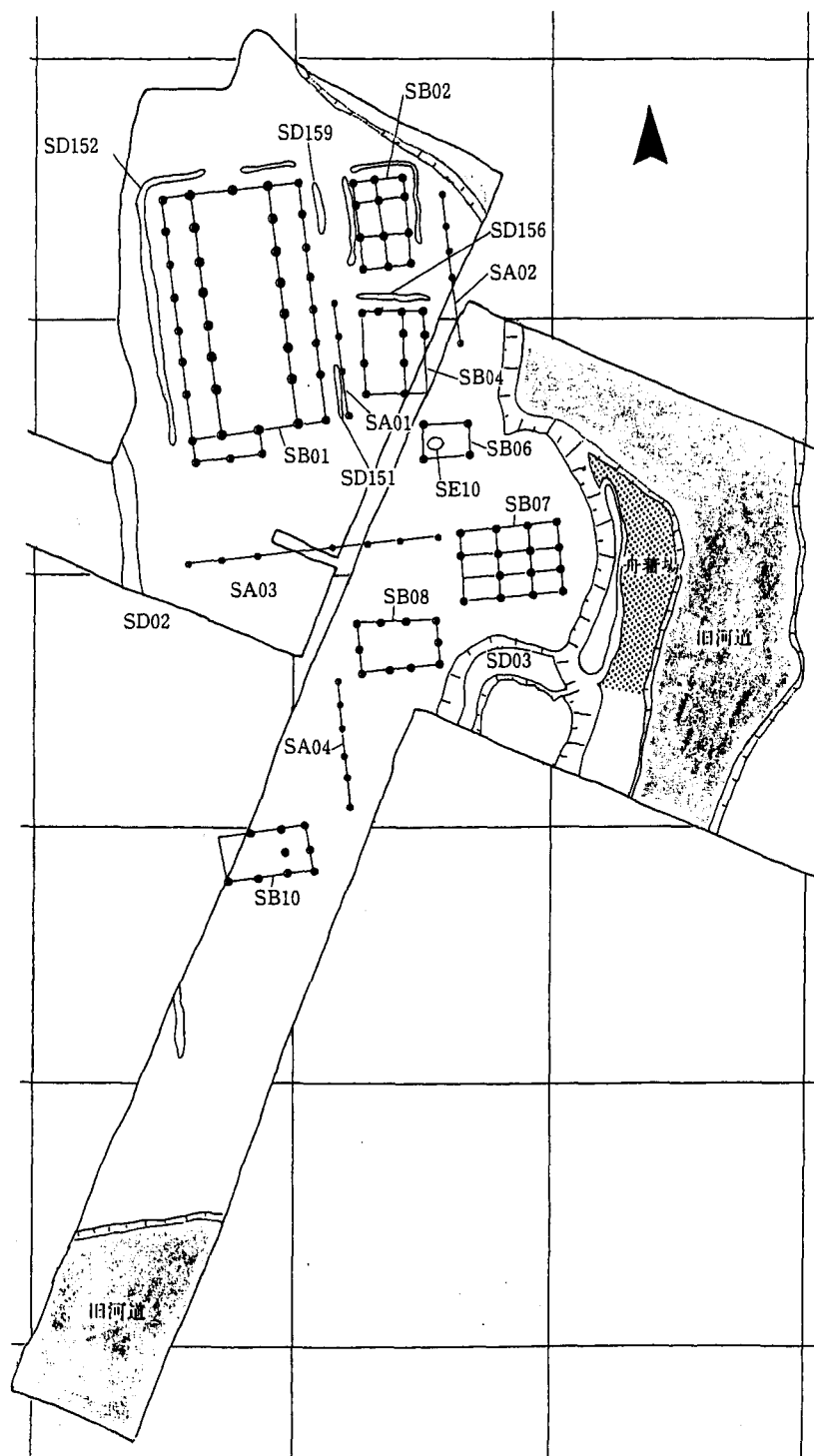


図19 新潟県門新遺跡（B期）遺構配置模式図 S=1/500
（新潟県和島村教育委員会『門新遺跡』1995年より）

施設であった可能性が最も高い。本遺跡から出土した木簡のうち、出挙と国司借貸に関わる記録簡、国名から書き始める付札の存在は、郡段階で行われたとされる公出挙の事務や、都への貢進物の発送作業を行う施設が遺跡内部に存在したことを如実にものがたっている。

全国的に「郡」が変質をとげるこの時期、八幡林遺跡・下ノ西遺跡の廃絶とともに、それに代わるように門新遺跡が出現する。

門新遺跡の調査成果を要約すると、次のとおりである【図 19】。

自然河川の蛇行部によって三方を囲まれた約 3,200 m² の範囲に、11 棟の掘立柱建物を中心とする多数の遺構が検出された。掘立柱建物の時期は、共伴遺物などから 10 世紀代のものと考えられ A～C の 3 時期に区分される。10 世紀第 2 四半期頃に位置づけられる B 期が遺跡の最盛期であり、平面積が 200 m² を超える SB01 を中心とし、倉庫など 6 棟の付属建物が伴っている。

B 期には、遺跡の内外を分ける明瞭な外郭施設が存在し、内部も溝・柵などで整然と区分されるなど、官衙風の構造を持っている。また、当該期の川岸には船着場状の遺構が確認され、物資の輸送等に内水面の積極的な利用がうかがえる。B 期の建物群は、遺構の内容や漆作業・鍛冶作業などの手工業生産の存在などから、律令体制崩壊後の新たな地域支配の拠点（開発領主の居宅）であった可能性が高い。C 期になると建物の規模が貧弱となり、周囲に畠を伴うなど、開発拠点としての性格は失われるのである。

2 山形県米沢市古志田東遺跡⁽¹⁵⁾

米沢市は、山形県の最南端部に位置している。米沢市の東・南・西部の三方は山地・丘陵が取り囲み、市街地となる中央から北部は米沢盆地の南端にあたる平坦地で、吾妻山地を源流とする最上川（松川）やその支流となる羽黒川・梓川（天王川）・鬼面川などによって形成された扇状地が広がっている。

古志田東遺跡は、松川扇状地の扇央部から末端部にあたり、平坦な水田地帯の標高 257 m に位置している【図 20】。遺跡の西側は標高 500～650 m の険しい笹野丘陵が迫り、東側を堀立川が流れている。遺跡周辺の地形は、東方向は比較的平坦な水田地帯が堀立川に接するように広がっており、南方向は緩やかな傾斜を保ちながら上流へと向かっている。北方向も平坦面が自然に下流に延びている。西側に進むと一変して急な勾配となり、笹野山麓から延びる台地を寸断するように 5 m 前後の旧松川によって形成された河岸段丘が発達している。

旧松川は、縄文後期から晩期にかけて、急速に進路を東側へと変えていった。河川の移動に伴って、残された地域には、窪地状に続く低湿地帯と枝分かれして新たに北流する旧堀立川が緩やかに流れていたと推測される。肥沃な堆積物で覆われる低湿地は水田耕作に適しており、河川は運河としての利用も可能とみた地方豪族らは、河川が大きく蛇行する対岸にその拠点の居館を構えたと考えられる。

古志田東遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構には、掘立柱建物跡 7 棟と河川路・土壇跡、井戸跡・溝跡等があり、遺跡は東西 85 m × 南北 90 m（約 760 m²）の範囲に遺存している【図 21】。

掘立柱建物跡（BY1）は、桁行 10 間（南北 24.4 m）× 梁行 3 間（東西 8.4 m）に北側を除く三面庇を伴う大型建物跡で、庇を含めた建物総面積は約 320 m²（約 97 坪）を呈し、平安時代の建物

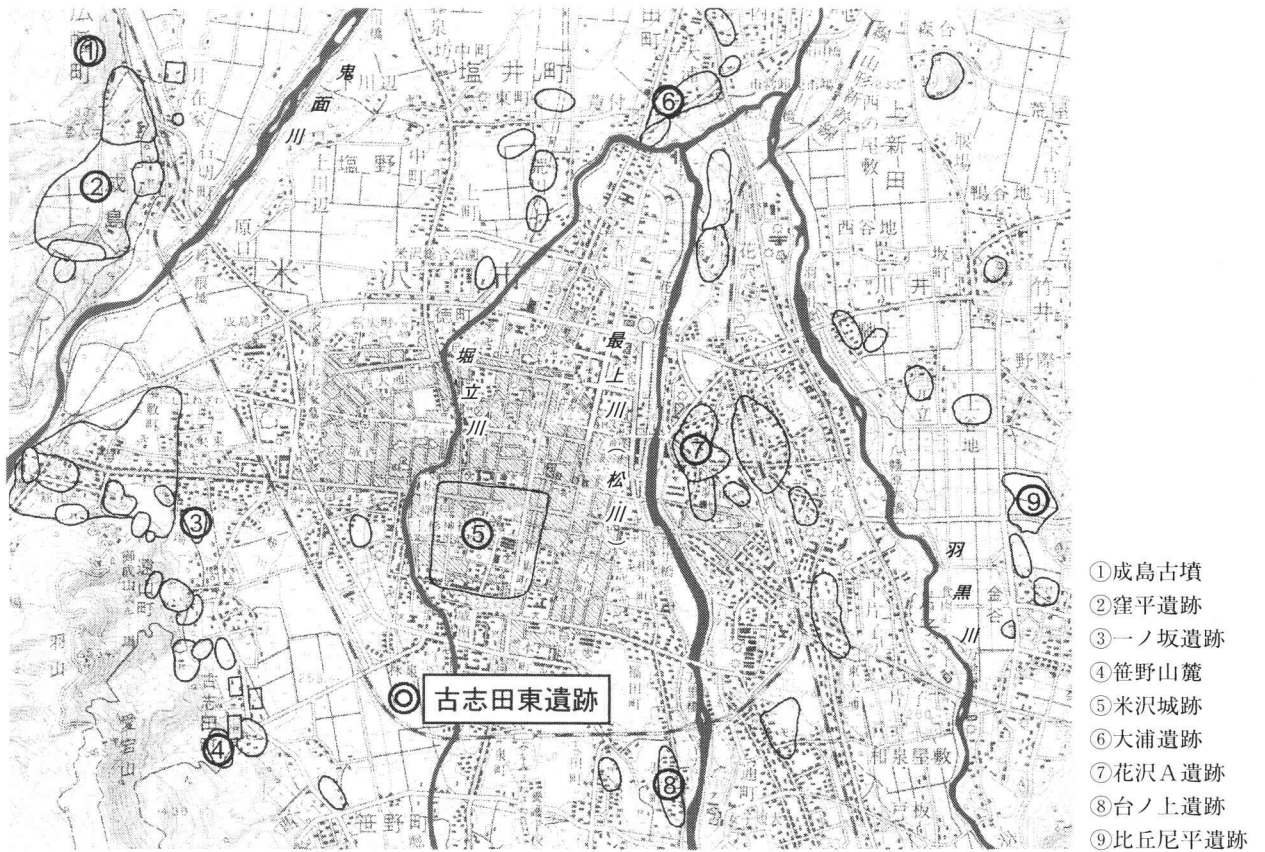


図 20 山形県米沢市古志田遺跡と周辺の遺跡分布・地形図
(米沢市教育委員会『古志田東遺跡』2000年より)

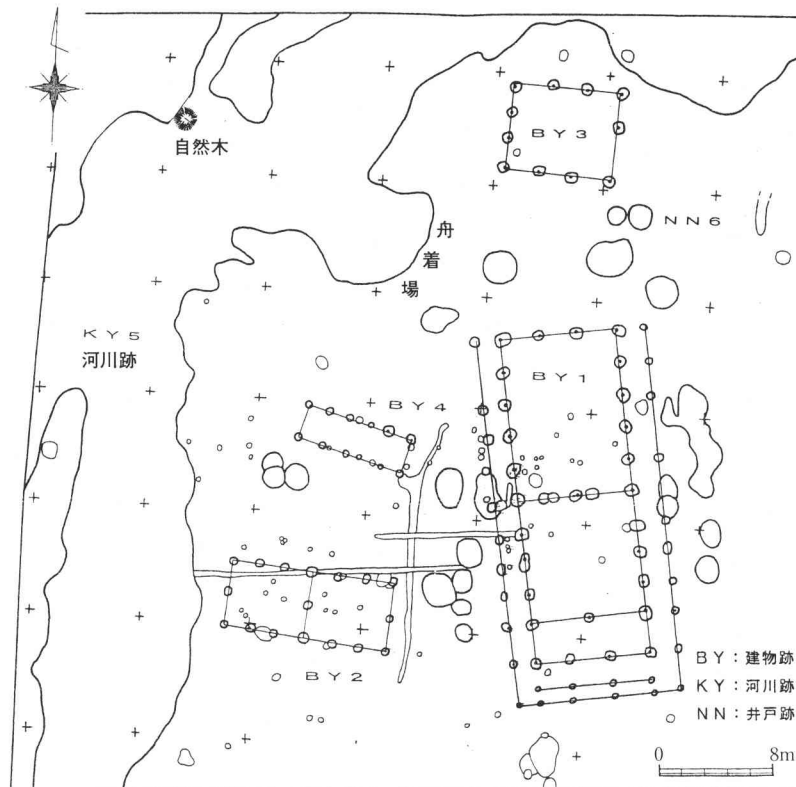


図 21 山形県米沢市古志田東遺跡遺構全体図 (米沢市教育委員会
古志田東遺跡現地説明会 <1999.
8.6> 資料より)

跡としては大規模な面積を有することから、主殿的建物と考えられる。この建物跡の周辺を取り囲み、倉庫跡（BY3）や廐建物跡（BY4）とみられる建物群を含め、他に6棟確認された。

河川跡（KY5）は、南側から北東方向に蛇行し、幅10m前後、深さは0.8～1.2mを測る。トレンチ調査により長さ約200mまで確認しており、BY3南西側付近の東側と対岸の西側で、ほぼ楕円形の入り江状の張出し部分は船着場とみることができる。

遺物の大半は河川跡から出土したものである。土器には土師器・須恵器・赤焼土器、木製品では木簡・木椀・木盤・曲物・物差し・櫛・独楽・弓・鋏・鐙・修羅等がある。土器はほとんど赤焼土器で、底部がやや小さく器高が高い特徴から、9世紀中葉～10世紀初頭とされている。墨書土器は約400点、その内容は「山田」「山田西」「千万」「吉」「王」などや、呪術的文様墨書土器が約30点ある。

木簡は15点確認されたが、その主要なものは次のとおりである【図22】。

第1号木簡は、「有宗案文」と記された題箋軸で、「案文」とは文書の控えを意味し、本遺跡内において、某氏の有宗という人物の作成した文書を卷子仕立てで保管していたことを示すものである。第2号木簡は、田人（農耕の民）を動員し、その人数を数度にわたり累計した記録簡であり、田人のうち、女性が7、8割を占めている点が注目される。第3号木簡は、第2号と同様、動員した労働者に関する記録である。小子（4～16歳）という未成年者を含めて、男性の労働力を258人にも及ぶ大規模に動員した際の記録簡といえる。第13号木簡は、オモテ面に「□船津運十人」と記され、河川の東船着場より出土したものであり、「船津」は船着場、「運十人」はその船着場で船荷の荷下ろしに動員された労働者に関する記録簡である。

結局のところ、本遺跡は、蛇行する河川の段丘上に沿って、大型建物跡を中心に7棟の建物が確認された。特に三面庇を有する大型建物は主殿と考えられ、県内の古代建物跡では最大級の規模を有する。また、河川に人工的な船着場を設け、その船着場から上がった箇所倉庫風建物が確認できる。荷の運搬用と思われる修羅は「ソリ」に近い形態であり、河川跡の東岸近くから出土している。

遺物では、木簡13点をはじめ、多様な木製品と約5,000点におよぶ土器群が河川跡から検出されている。大半の土器は原状に近い状況で出土したと考えられることから、祭祀に使用後、一括廃

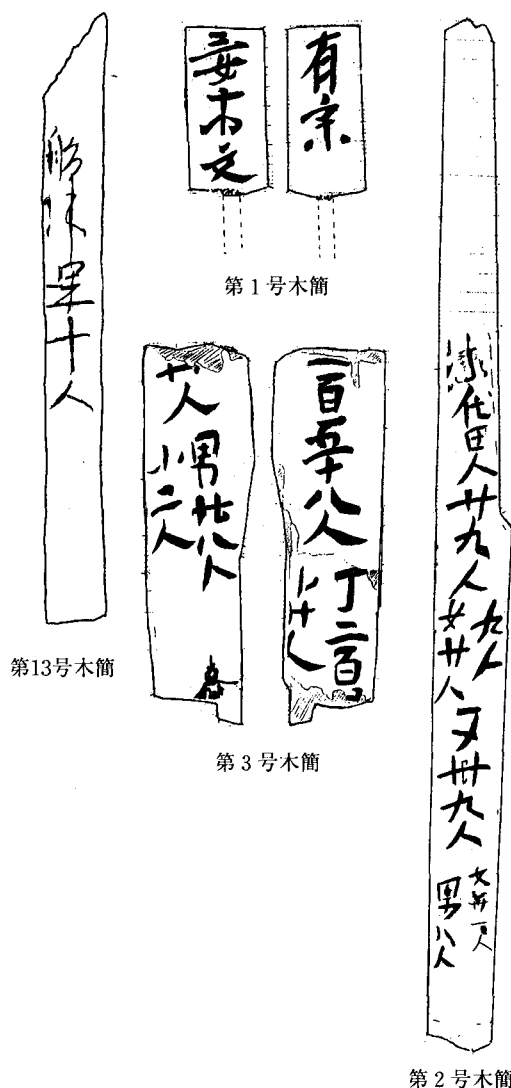


図22 山形県米沢市古志田遺跡出土木簡
（米沢市教育委員会 古志田東遺跡
現地説明会〈1999.8.6〉資料より）

棄されものと推測される。

遺跡の性格は、十数点の木簡の内容から推して、本遺跡が在地の有力者層の拠点として、大規模な農業経営と河川を利用した流通を積極的に推進し、多数の労働力を徴発し、独立した行政機能をも備えた施設であることを如実にものがたっている。9世紀後半から10世紀の地方行政は、国衙支配の展開と郡の変質をもたらした。王臣家などと結びついて擡頭しつつあった在地勢力は、かつてほど郡を媒介として在地を掌握することに積極的な意義を見出しえなくなる。彼らは、従来の郡家に代わって新たな拠点を設営したと考えられ、中世の地方社会へと連動してゆくものと推測される。

むすびにかえて

これまでの古代地域支配に関する研究は、専ら政治的支配要因に主眼を置いてきたが、本稿では、自然環境としての河川との関わりを通して地域支配の実態を明確にすることを目指した。

以下、小稿では、地域支配と河川については、次の四つの新たな視点から究明を試みてみた。

まず第1点に、これまで地理的關係から内陸部とみられた地域の中に、外洋に面する河口と同様に、直線的に河川が外洋につながり、“第二河口”として位置づけられた地域が存在したことがあげられる。その事例として、北上川と陸奥国磐井地方（後に平泉が置かれた所）および太日川と下野国寒川郡をとりあげた。

第2点は、宮都や城柵のような国家施設造営にあたり、水運の便を十分に活用するために宮都や城柵内部に河川を引き込む形で占地することである。しかし、それは水害という危険因子を同時に抱え込むことを意味している。いいかえれば、これまで宮都や城柵（長岡京や志波城の例）について、移転の理由に水害を直接的事由としてあげてきたが、水運の便と水害は背中合わせの關係にあり、造営当初より十分予測されていたと考えられる。したがって、造営計画の段階で、長岡京は平安京へ、志波城は徳丹城への移転はおそらく予期されていた可能性があり、一連の造営事業とみなすこともできるのである。

第3点としては、地方豪族の支配拠点は外洋に望む河口部にあり、そこに「津司」および「津長」が存在したことをあげた。すなわち、令制下において郡津として「津司」という官職および施設が置かれ、その津司には「津長」という責任者が存在し、津に出入りする客（国司など）に対応したであろう。また、その津の運営費用は、津の周辺の民に出挙し、捻出していたことが、畝田・寺中遺跡出土木簡で確認された。

第4点は、9世紀後半から10世紀にかけて、在地で新たに擡頭してきた豪族層の拠点施設は、川を取り込み、船着場を設けていたことである。その施設内での手工業的生産や農業経営の活発な様相は、近年の新潟県門新遺跡や山形県古志田遺跡の発掘調査成果からうかがい知ることができる。新興豪族層の活発な生産活動は、河川によって促進されたものと考えられる。

以上の4点に加えて、最後に全体に関わる重要な視点として、次の二つを提示した。

一つは河川の運行に曳船方式を重視しなければならないとしたことである。この曳船による輸送は、沿岸の安全確保、つまり治安維持が必要条件となるのである。「田夷」を冠した遠田郡領の勢力基盤も、北上川沿岸を支配し、その水運を磐井地方の勢力との連携によってその手中に収めてい

たことによることが明らかとなった。

もう一つは、地域支配の拠点には河川と結びつき、その河川を活用するために津を設定するということである。その場合、河川の本流に津を設定せず、その本流に注ぎ込む支流に津が置かれる場合が多い。本流へ接続する支流がない場合は、人為的に運河を掘削してそこに津を設置し物資を曳船で運漕している。

さらに付け加えるならば、河川交通と陸上交通とは、必ず結節している。すなわち、河・潟などの津は陸路に接続している。水上を運漕した物資は津で陸揚げされ、さらに陸路で運送されたのである。

小稿は、古代の地域支配と河川との関わりについて概述してきたが、今後、河川の自然環境としての多様な実態をさらに詳細に分析し、地域社会の動きといかに関わったか究明していきたい。

註

- (1)——下野国寒川郡の歴史的意義については、小山市博物館『第34回企画展 下野国寒川郡—古代・中世の軌跡—』(1997年)展示図録で詳細に紹介している。小稿でもその成果に依拠し、一部引用させていただいた。
- (2)——牡鹿地方が古代陸奥国北部への入り口として位置づけられ、“海の道”で九十九里沿岸の上総国武射郡地方や紀伊水軍との関連が密接であったことは、すでに拙稿「海道・牡鹿地方」(石巻市史編さん委員会『石巻の歴史』第6巻、特別史編、1992年)で詳細に触れているので参照してほしい。
- (3)——『続日本紀』延暦9年5月庚午条
陸奥国言。遠田郡領外正八位上勳八等遠田公押人款云。己既洗濁俗。更欽清化。志同内民。風仰華土。然猶未免田夷之姓。永胎子孫之恥。伏望。一同民例。欲改夷姓。於是賜姓遠田臣。
- (4)——註(3)に引用した『続日本紀』延暦9年5月庚午条、および以下の『日本後紀』弘仁3年9月戊午条があげられる。
陸奥国遠田郡人勳七等竹城公金弓等三百九十六人言。己等未脱田夷之姓。永胎子孫之恥。伏請改本姓為公民。被停給祿。永奉課役者。勅可。唯卒從課役。難勸遺類。宜免一身之役。仍賜勳七等竹城公金弓。勳八等黒田竹城公繼足。勳九等白石公真山等男女一百廿二人陸奥磐井臣。(下略)
- (5)——註(4)の引用史料。
- (6)——静岡県富士川町史編纂委員会編『富士川町史』(1962年)より引用。
- (7)——以下、長岡京の造営と遷都および立地環境については、次の文献を参考にした。
イ、林陸朗『長岡京の謎』新人物往来社、1972年
ロ、中山修一編『よみがえる長岡京』京都新聞社、1984年
ハ、日下雅義「古代都京の立地環境」(『長岡京古文化論叢』所収、同朋舎出版、1986年)
ニ、拙稿「造都と征夷」(橋本義彦編『古文書の語る日本史』2、平安 所収、筑摩書房、1981年)
- (8)——小林清『長岡京の新研究』比叡書房、1975年
- (9)——志波城跡の発掘調査成果などについては、盛岡市教育委員会『志波城跡Ⅰ』1981年など。
- (10)——徳丹城跡の外郭東部地区の発掘調査成果などについては、『矢巾町教育委員会徳丹城跡—第40・第41次発掘調査—』(1996年)以降、各年次の調査報告書による。
- (11)——矢巾町教育委員会『徳丹城跡—第49次発掘調査—』2001年
- (12)——石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』第3号、2000年、「石川・畝田・寺中遺跡」(木簡学会『木簡研究』第22号、2000年)
- (13)——いわき市教育委員会『荒田目条里遺跡木簡調査略報 木簡が語る古代のいわき』1996年
- (14)——新潟県和島村教育委員会『門新遺跡』(和島村文化財調査報告書第4集、1995年)
- (15)——米沢市教育委員会『米沢市埋蔵文化財調査報告書第70集 古志田東遺跡』2000年

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(2000年12月25日受理、2001年9月4日審査終了)

Regional Control and Rivers in Ancient Times

HIRAKAWA Minami

The current state of Japanese historical studies is one which strives to show an accurate representation of the history of interaction between man and nature. In this paper, the author tries to identify the circumstances of regional control through man's involvement with rivers as a natural environment.

The writer investigated the following four points in terms of regional control and rivers.

1. Among places that have been considered inland areas, there existed locations that had rivers that connected directly to the ocean, and were in reality considered "secondary estuaries", the same as estuaries facing onto the ocean. The Kitakami River in the Iwai region of the ancient province of Mutsu and the Futohi River in the Shimotsuke Samukawa region are such examples.

2. Facilities constructed by the nation, such as at Kyuto (Place of Royal Authority) and Josaku (fort), were located inland to draw rivers in to fully utilize water transport. However, that raised the problem of the natural disaster of flooding at the same time. In other words, up to this point flood damage has been thought to be the direct cause of the disuse of the old capital in Nagaokakyo or Shiwajo Fort. However, this potentiality for flooding could have been enough estimated from the start of construction. Thus, it is possible to consider that it was expected from the construction planning stage that this was a sequenced undertaking in which a transfer would occur from Nagaokakyo to Heiankyo and from Shiwajo Fort to Tokutanjo Fort.

3. "*Tsu no tsukasa*" (the port office) was established to control harbors and estuaries that looked out on the ocean and functioned as district ports, was established under the Ritsuryo system. The activities of "*Tsu no Osa*" (head official of ports) who was responsible for overseeing those entering and leaving the ports are known from the *mokkan* (wooden tablets with official message) excavated from sites located in the Iwaki county of Mutsu province and the Kaga county of Echigo province.

4. Results of excavation surveys in recent years from the Kadoshin Sites in Niigata Prefecture and the Furushida Sites in Yamagata Prefecture show that from the latter half of the ninth century to the tenth century, facilities that were the bases for powerful clans appeared in var-

ious places. Rivers were rerouted, boat docks were built, and agricultural administration and handicraft production activities took place within the facilities. In addition, it was emphasized that movement along the rivers in ancient times was, as in modern times, conducted by tug-boats.

In this paper, the writer has outlined the points above concerned the relationship between regional control in ancient time and rivers. In the future, he hopes to further analyze the various conditions of rivers as natural environment and to further investigate how the rivers were involved in the formation of regional society.